

コトハ當然ニ終了ス。而シテ其戰爭ノ終了ハ講和條約ニ因ルト將タ事實上ノ終了ニ因ルトヲ問フコトナシ。戰爭終了後ハ俘虜タリシ者ニ對シテ捕ヘタル國ハ何等ノ監督ヲモ爲スコトヲ得ザルカ。此點ニ關シテハ陸戰ノ法規慣例ニ關スル規則ニ於テ規定スル所ナク、理論トシテハ既ニ俘虜ニ非ザルガ故ニ之ニ對シテ何等ノ監督ヲモ爲スコトヲ得ズト云ハザルベカラズ。然レドモ理論ニノミ趨リテ之ヲ抛擲スルトキハ舊俘虜ハ如何ナル暴橫ヲ爲スヤモ測ルベルカラズ。是レ國家ニ取リテ甚ダ不利トスル所又俘虜タリシ者ニ於テモ全ク國家ノ干涉ヲ脫スルトキハ直ニ衣食ニ窮スルガ如キ又ハ行先ニ迷フガ如キコトアルヲ以テ實際ニ於テハ雙方ノ利益ヲ圖ランガ爲メ便宜上戰爭終了ノ後ニ於テモ其本國ニ引渡スマデハ之ニ一定ノ監督ヲ加フルコトヲ得ベキモノトセリ。

俘虜ガ俘虜タルトキニ於テ罪ヲ犯シ其審理中ニ俘虜タルコトノ終了シタル場合ニ於テモ尙ホ其國家ハ引續キ審理裁判ヲ爲スコトヲ得ルヤ。又判決後刑ノ執行中俘虜タルコト終了シタルトキハ如何其終了ト共ニ之ヲ放還セザルベカラザルカ。此問題ニ對シ疑モナク決定シ得ルハ俘虜ノ犯シタル罪ガ普通ノ犯罪ナル場

合ナリ。何トナレバ此場合ハ俘虜トシテ處罰シ得ルニアラズ普通人トシテ處罰スルモノナレバ俘虜タルコトノ終了スルト否トハ毫モ關係セザレバナリ。只疑ノ存スルハ俘虜タルコトヲ前提トスル犯罪ナリ。例ヘバ軍隊ノ紀律ヲ侵シ又ハ逃走ヲ謀リタル場合ノ如シ。斯ル場合ニ於テハ戰爭終了後果シテ其執行又ハ審理ヲ中止セザルベカラザルカ。此點ニ付テモ陸戰ノ法規慣例ニ關スル規則ニ規定ナシ。然レドモ犯罪ハ俘虜ガ已ムト共ニ犯罪タルコトヲ失フニアラザルガ故ニ、其後ニ於テ執行又ハ審理ヲ繼續シテ支障ナキコト明カナルベシ。一九一九年ノ對獨講和條約ハ之ヲ紀律違反ノ犯行ト其他ノ犯行トニ分チ、前者ニ付テハ第二百十八條ニ於テ「紀律違反ノ犯行ニ付取調中又ハ處罰中ノ俘虜及抑留人民ハ其處罰又ハ取調手續ノ完了スルト否トヲ問ハズ之ヲ送還スベシ、前項ノ規定ハ千九百十九年五月一日以後ノ犯行ニ付罰ヲ受クル俘虜及抑留人民ニハ之ヲ適用セズ」ト定メ、後者ニ付テハ第二百十九條ニ於テ「紀律違反以外ノ犯行ニ付取調中又ハ處罰中ノ俘虜及抑留人民ハ尙之ヲ抑留スルコトヲ得」ト定メタリ。

第三款 間 諜

間諜トハ一方ノ交戦者ニ通ズルノ意思ヲ以テ他ノ一方ノ作戦地帯内ニ於テ隱密ニ行動シ又ハ虛偽ノ口實ヲ構ヘテ各種ノ情報ヲ蒐集シ若ハ蒐集セントスル者ヲ謂フ。左ニ間諜ノ要素ヲ擧グベシ。

第一、情報ヲ蒐集スルコト

第二、作戦地帯内ニ於テ情報ヲ蒐集スルコト

第三、一方ノ軍事上ノ状態ヲ他方ニ通ズルノ意思ヲ有スルコト

第四、虛偽又ハ隱密ノ方法ヲ用フルコト

間諜ヲ捕ヘタルトキハ必ず軍法會議ニ於テ審理ノ上ニアラザレバ之ヲ處罰スルコトヲ得ズ。間諜ヲ處罰スルハ間諜ヲ以テ罪惡ナリトスルガ爲ニアラズシテ、之ヲ處罰スルコトニ依リテ間諜行爲ヨリ受クル損害ヲ減殺セントスルノ趣旨ニ出デタルモノナリ。

陸戦ノ法規慣例ニ關スル規則第二十九條ノ規定左ノ如シ。

交戦者ノ作戦地帯内ニ於テ對手交戦者ニ通報スルノ意思ヲ以テ隱密ニ又ハ虛偽ノ口實ノ下ニ行動シテ情報ヲ蒐集シ又ハ蒐集セントスル者ニ非ザレバ之ヲ間諜ト認ムルコトヲ得ズ。

故ニ變裝セザル軍人ニシテ情報ヲ蒐集セムガ爲敵國ノ作戦地帯内ニ進入シタル者ハ之ヲ間諜ト認メズ又軍人タルト否トヲ問ハズ自國軍又ハ敵軍ニ宛テタル通信ヲ傳達スルノ任務ヲ公然執行スル者モ亦之ヲ間諜ト認メズ通信ノ傳達スル爲及總テ軍又ハ地方ノ各部門ノ聯絡ヲ通ズル爲輕氣球ニテ派遣セラレタルモノ亦同ジ。

又間諜ハ間諜タルノ行爲ヲ遂ゲタル後即チ其目的ヲ達シテ所屬軍隊ニ復歸シタル後ニ於テ更ニ捕ヘラルルコトアルモ前ニ間諜タリシ故ヲ以テ處罰セララルモノニアラズ。同第三十一條ニ曰ク「一旦所屬軍ニ復歸シタル後ニ至リ敵ノ爲ニ捕ヘラレタル間諜ハ俘虜トシテ取扱ハルベク、其前ノ間諜行爲ニ對シテハ何等ノ責ヲ負フコトナシ」ト、故ニ斯ル場合ニハ處罰ヲ受クルコトナク而モ他ノ交戦者ト同ジク俘虜トシテ待遇セララルモノトス。

第四款 病者、傷者、死者

第一、死者

死者ニ關シテハ萬國條約中ニ何等規定スル所ナク唯俘虜ノ死亡スル場合ニ付キ陸戰ノ法規慣例ニ關スル規則第十九條第二項ニ於テ俘虜ノ死亡證書及埋葬ニ關シテハ內國陸軍軍人ト同一ノ規則ニ遵ヒ且其身分階級ニ相當シタル取扱ヲ爲スベキ旨ヲ規定シ、其第一項ニ於テ遺言書ノコトヲ規定スルノミ、從テ今日ニ在リテハ戰場ニ於ケル死者ニ關スル條約ノ規定ハ「ジュネヴア」條約第三條第二項ニ「右占領者ハ死者ノ埋葬又ハ火葬ガ其ノ死體ヲ綿密ニ検査シタル上ニ於テ行ハルルコトニ注意スベシ」トアルニ遵據スベク、尙ホ一般ノ原則トシテ從フベキコトハ左ニ之ヲ略述スベシ。

- 一、葬ルベキコト 此原則ヲ生ズル理由ニアリ、其一ハ死體ヲ辱シムベカラズトノ觀念ニ基ク。而シテ此原則ハ自國ノ軍人ナルト敵國ノ軍人ナルトヲ問ハズ又軍人ニアラザル者ニ對シテモ其適用アリ。其二ハ病毒ノ傳播ヲ防止セントスルニ在リ。
- 二、死者ノ何人ナルカヲ調査スベキコト
- 三、死者ノ財産及遺書ハ成ルベク之ヲ取纏メテ其遺族ニ交付スベシ

四、將ニ死セントスル者ニ對シテハ其遺言ヲ聞キ遺言書ヲ作成スベシ

第二、病者、傷者

此等ノ者ヲ不可侵トスルニ付テハ初メ千八百六十四年ノ「ジュネヴア」條約ニ於テ定メタル所ナルガ、千九百〇六年之ヲ改正シタリ、其第一條ニハ左ノ如ク規定シタリ。

軍人又公務上軍隊ニ附屬スル其他ノ人員ニシテ負傷シ又ハ疾病ニ罹リタル者ハ國籍ノ如何ヲ問ハズ之ヲ其ノ權内ニ收容シタル交戰者ニ於テ尊重看護スベキモノトス

但シ病者及ビ傷者ヲ敵ニ遺棄スルノ已ムヲ得サルニ至リタル交戰者ハ軍事上ノ狀況ノ許ス限り其ノ看護ヲ幫助セシメンガ爲メ衛生部員及ビ衛生材料ノ一部ヲ病者傷者ト共ニ遺留スベシ

陸戰ノ法規慣例ニ關スル條約第二十一條ニハ

病者及傷者ノ取扱ニ關スル交戰者ノ義務ハ「ジュネヴア」條約ニ依ルト定メテ凡テ「ジュネヴア」條約ニ讓レリ。病者傷者ガ敵國軍隊ノ手ニ陥リタルト

キハ俘虜タルベキヤ否ヤ、舊條約ニ於テ疑問ナリシヲ以テ、改正條約第二條第ニ項ニ於テ左ノ如ク規定シタリ。

交戦者一方ノ傷者又ハ病者ニシテ他ノ交戦者ノ權内ニ陥リタル者ハ前條ニ依リテ看護ヲ享クルノ外俘虜ト爲リ俘虜ニ關スル國際公法ノ一般規則ヲ適用セラルルモノトス。

衛生上ノ移動機關及ビ衛生勤務ノ固定營造物ハ害敵行爲ノ爲ニ使用セラレザル限ニ於テ尊重保障セラルベク、左記ノ事項ハ其保護ヲ失フノ原因トナラズ。

第一 移動機關又ハ固定營造物ノ人員ガ武装シ其ノ武器ヲ自己又ハ傷者病者ノ防衛ノ爲ニ使用スルノ事實

第二 武装看護人ノ在ラザルニ當リ正式ノ命令ヲ携帯スル步哨又ハ衛兵ヲシテ移動機關又ハ固定營造物ヲ守衛セシムルノ事實

第三 傷者ヨリ取上ゲタルモ未ダ所轄部署ニ引渡サレザル武器及ビ藥筒ガ移動機關又ハ固定營造物内ニ發見セラレタルノ事實

左ニ掲グル人員ハ皆尊重保護ヲ受クベク敵手ニ陥ルモ其ノ指揮ノ下ニ在リテ引續

キ其職務ヲ執行スベク、病者傷者等ノ幫助ヲ爲スノ必要ナキニ至ラバ軍事上ノ必要ト相容ルル時期及道路ニ從ヒ之ヲ所屬軍隊又ハ其ノ本國ニ送還スベシ。

第一 傷者病者ノ收容輸送及ビ治療並ニ衛生上ノ移動機關及ビ固定營造物ノ事務ニ専ラ従事スル人員

第二 軍隊附屬ノ救法者

第三 武装看護人ノ在ラザル場合ニ衛生上ノ移動機關又ハ固定營造物ヲ守衛スル人員

第四 本國政府ガ適法ニ認可シタル篤志救恤協會ノ人員ニシテ軍隊衛生上ノ移動機關及固定營造物ニ使用セラルル者

第五 中立國ニ於テ認可セラレタル協會ガ當該交戦者ノ許可ヲ受ケテ交戦者ノ幫助ヲ爲サシムル衛生上ノ人員及移動機關

軍隊衛生勤務上ノ特別記章ハ「白地赤十字」ノ紋章トス（同條約第十八條）。前掲第一乃至第五ノ人員ハ所轄陸軍官憲ヨリ交付シ且其印章ヲ捺シタル白地赤十字ノ臂章ヲ左腕ニ裝著スベシ。衛生上ノ移動機關及固定營造物ニシテ陸軍官憲ノ認許ヲ

受ケタルモノハ白地赤十字旗ヲ掲グルコトヲ得ベク該記章旗ハ該機關又ハ營造物所屬交戦者ノ國旗ト共ニ掲揚スベシ、但敵ノ權内ニ陥リタル衛生上ノ移動機關ハ其地位ノ繼續スル間赤十字旗ノ外他ノ國旗ヲ掲揚スベカラズ。前掲第五ノ中立國ノ衛生上ノ移動機關ハ赤十字旗ト共ニ所屬交戦者ノ國旗ヲ掲揚スベシ。赤十字旗赤十字臂章又ハ赤十字ナル文字ノ權利ナキ使用ハ記名國皆國內法ヲ以テ之ヲ禁ジ且制裁ヲ與フベシ。大正二年勅令第十六號ハ此事ニ關シ左ノ如ク規定セリ。

第一條 擅ニ白地ニ赤十字ノ記章、赤十字若ハ「ジュネヴア」十字ノ名稱又ハ之ト類似ノ記章若クハ名稱ヲ使用シタル者ハ五十圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス

擅ニ「ジュネヴア」條約ノ原則ヲ海戰ニ應用スル條約第五條ニ定メタル特殊徽章又ハ之ト類似ノ徽章ヲ船舶ニ使用シタル者ノ罰亦前項ニ同ジ

第二條 戰時ニ於テ擅ニ赤十字ノ記章又ハ之ト類似ノ記章ヲ表示シタル旗又ハ臂章ヲ使用シタル者ハ三月以下ノ禁錮ニ處ス前條第二項ノ罪ヲ犯シタル者亦同ジ

「ジュネヴア」條約ハ締盟國間ニ戰爭アル場合ニ限り遵守ノ義務アルモノトス（同條約第二十四條）。

「ジュネヴア」條約ノ解釋ニ關シ爭議ヲ生ジタル場合ニ仲裁裁判ヲ以テ解決スベキコトヲ千九百六年七月六日ノ「ジュネヴア」條約改正萬國會議最終議定書ニ於テ「ジュネヴア」條約ノ補釋及適用ヲ出來得ル丈ケ正確ナラシメンガ爲各締盟國ハ其ノ場合ト狀況トノ許ス限リ該條約ノ解釋ニ關シ平時ニ於テ締盟國相互間ニ生ズルコトアルベキ紛爭ヲ海牙常設仲裁裁判所ニ提出セムコトノ希望ヲ本會議ハ表彰ス。ト定メタレドモ我國及英國ハ之ニ加ハラズ。

「ジュネヴア」條約ノ原則ヲ海戰ニ應用スルノ條約ハ千九百七年海牙ニ於ケル第二回萬國平和會議ノ際ニ締結セラレタリ（第六章第二節第二款參照）。

第五款 軍 使

軍使トハ戰時ニ於テ交戦國一方ノ軍隊ヨリ他方ノ軍隊ニ派遣セラレ他方ノ軍隊ヨリ受取ラルル使者ヲ云フ。故ニ軍使ハ戰時ニ於テ交戦國ノ一方ヨリ交戦國他方ニ派遣スル使者トハ之ヲ區別セザル可カラス。戰時ニ於テ交戦國一方ヨリ他方ヘ派遣スル使者ハ一種ノ外交官ニシテ公使ト同一ノ特權ヲ享有ス、其例ノ著シキ者ハ講和談判ノ爲ニ派遣スル使節ナリ。軍使ハ之ニ反シテ一方ノ軍隊ヨリ他方ノ軍隊ニ派遣ス

ルモノナレバ其權限ノ如キモ軍事上ノ事項ヲ議定スルニ限ラル、例ヘバ一時戰爭ノ中止ヲ約シ又ハ投降ヲ勸告スル等ノ如シ。然レドモ軍使トシテ認ムルハ之ヲ受クル軍隊ニ於テ之ヲ受クルノ意思アル場合ニ限ルモノナリ。一方ノ派遣シタル軍使ヲ他方ノ軍隊ハ必シモ受ケザルベカラザル義務アルモノニアラズ。陸戰ノ法規慣例ニ關スル規則第二十三條第一項ニ曰ク「軍使ヲ差向ケラレタル部隊長ハ必ズシモ之ヲ受クルノ義務ナキモノトス」ト。

軍使ハ軍使トシテ不可侵權ヲ有スル者ナリ。故ニ軍使ガ此權利ヲ利用シテ敵國軍隊ノ軍情ヲ探知シ若ハ叛亂ヲ煽動スルガ如キ行爲アリタルトキハ其特權ヲ失フベキハ當然ニシテ捕ヘラレタルトキハ普通ノ交戰者ト同一ノ取扱ヲ受クベキモノトス。此點ニ關シテ同第三十四條ハ「軍使ガ背信ノ行爲ヲ教唆シ又ハ自ラ之ヲ行フ爲其他特權アル地位ヲ利用シタルノ證迹明確ナルトキハ其ノ不可侵權ヲ失フ」ト規定セリ。然レドモ軍使ハ本隊ニ歸屬後相手方軍隊ノ模様ヲ告グベカラザル義務ヲ負フモノニアラズ。却テ之ヲ通告スルノ權利アリ、故ニ軍使ヲ受クル軍隊ハ軍使ガ機密ヲ探知セントスルヲ防グニ必要ナル方法ヲ探ルコトヲ得。例バ通路ヲ迂回セシメ若ハ目隱ヲ

施スガ如シ。同第三十三條第二項ニ「部隊長ハ軍使ガ軍情ヲ探知スル爲其使用ヲ利用スルヲ防グニ必要ナル一切ノ手段ヲ執ルコトヲ得」ト規定スルモノ是ナリ。又軍使ハ必ズシモ之ヲ陣營内ニ於テ受クベキ義務ナク途中ニ於テ會見スルモ可ナリ。

軍使ガ軍使タルニハ形式上ノ要件トシテ白旗ヲ掲グルコトヲ要ス。從テ其旗手並ニ軍使ニ從屬スル喇叭手、鼓手及通譯官ノ如キモ不可侵權ヲ有スルモノトス。同第三十二條ニ曰ク「交戰者ノ一方ノ命ヲ帶ビ他ノ一方ト談判ヲ開ク爲メ白旗ヲ掲ゲテ來ル者ハ之ヲ軍使トス。軍使並ニ之ニ隨從スル喇叭手、鼓手、旗手及通譯ハ不可侵權ヲ有ス」ト。蓋是等ノ者ハ軍使ノ行動ヲ幫助スル者ナレバナリ。

第二節 物ニ關スル法規

陸上ニ於ケル敵ノ財産ヲ先ヅ其所有者ヲ標準トシテ區別スルトキハ國有財産、公有財産及私有財産ノ三ト爲スコトヲ得ベク、更ニ之ヲ法律上ノ性質及戰爭ノ用法上ヨリ觀察シテ説明スルコトヲ得ベシ。

第一、國有財産

國有財産ヲ其性質上ヨリ區別シテ動産不動産ト爲シ更ニ動産不動産ノ戰爭ノ用法

上ヨリ區別シテ(一)戦争ノ用ニ供スルモノト(二)戦争ノ用ニ供セザルモノトニ分チ(一)ヲ更ニ細別シテ(イ)戦争ノ用ニ供シ得ベキモノト(ロ)事實上戦争ノ用ニ供シタルモノトニ區別ス。和蘭ノ「グロチウス」ハ財産ヲ分チテ(一)戦争ノ用ニ供シ得ベキモノト(二)平和ノ用ニ供シ得ベキモノト(三)戦争及平和ノ用ニ併セ用キ得ベキモノトノ三ト爲セリ。國有動産ニシテ戦争ノ用ニ供スルモノ即チ戦争ノ用ニ供シ得ベキモノ及事實上戦争ノ用ニ供シタルモノハ之ヲ沒收スルコトヲ得、之ニ反シテ戦争ノ用ニ供スルコトヲ得ザル性質ノモノニシテ且實際戦争ノ用ニ供セザルモノハ之ヲ沒收スルコトヲ得ズ。

國有ノ不動産モ亦動産ト同ジク戦争ノ用ニ供スルモノ、即チ戦争ノ用ニ供シ得ベキモノ例ヘバ兵營ノ如キハ之ヲ破壊スルコトヲ得ベシ。次ニ實際戦争ノ用ニ供シタルモノ、例ヘバ博物館ヲ以テ陣營ニ充テタル場合ノ如キハ之ヲ破壊スルコトヲ得ベシ。之ニ反シテ宗教、慈善、教育、技藝及學術ノ用ニ供スル建設物ハ之ヲ破壊スルコトヲ許サズ。然レドモ單ニ之ヲ使用スルハ妨ゲザル所ナリ。尤モ戦争ノ用ニ供シ得ベキモノト雖モ實際ニ於テ其用ニ供セザルモノ例ヘバ森林ノ樹木ノ如キハ之ヲ處分スルコトヲ得ズ。唯之ニ對シテ用益權ヲ有スルノミ。但其軍隊ノ行動上必要缺クベカラザル場合ニ於テハ例外トシテ之ヲ處分スルコトヲ得。例ヘバ燃料ノ缺乏ヲ來シ或ハ軍用鐵道敷設ノ場合ニ枕木其他建築ノ不足ヲ來シタルトキノ如キハ之ヲ採伐スルコトヲ得ベシ。

第二、公有財産

公有財産ハ動産タルト不動産タルトヲ問ハズ戦争ノ用ニ供スルコトヲ目的トスルモノニアラズ。例ヘバ紀念碑、育兒院、貧民院、圖書館、寺院、美術館、博物館及其内ニ在ル財産ノ如シ。從テ事實上戦争ノ用ニ供シタル場合ニアラザレバ之ヲ破壊若クハ沒收スルコトヲ得ズ。然レドモ單ニ之ヲ使用シ若クハ押收スルコトヲ妨ゲズ。

公有財産ニ付テハ陸戰ノ法規慣例ニ關スル規則第五十六條ニ於テ「市區町村ノ財産並ニ國ニ屬スルモノト雖モ宗教、慈善、教育、技藝及學術ノ用ニ供セララル建設物ハ私有財産ト同様ニ之ヲ取扱フベシ右ノ如キ建設物、歷史上ノ紀念建造物、技藝及學術上ノ製作品ヲ故意ニ押收、破壊又ハ毀損スルコトハ總テ禁ゼラレ且訴追

セラルベキモノトス」ト規定セリ。

第三、私有財産

私有財産ハ不可侵ヲ以テ原則トス。私有財産ト雖モ戦争ノ用ニ供シ得ベキモノ夥多アリ。例ヘバ私人ノ有スル刀劍、銃砲、彈藥等ノ如シ。然レドモ之ヲ沒收スルコトヲ許サズ只押收ノ權利アルノミ、軍人ガ國家ヨリ下附セラレタル以外ニ携帯スル武器ハ之ヲ沒收スルコトヲ得ベシ。何トナレバ性質上戦争ノ用ニ供シ得ベキモノニシテ、而モ其用ニ供シタルモノナレバナリ。又縱令事實上戦争ノ用ニ供セザル場合ニ於テモ將ニ供セントシタルモノナラバ之ヲ沒收スルコトヲ得ベシ。當ニ軍人ノ有スル武器ニ付テ然ルノミナラズ一私人ノ有スル物ト雖モ戦争ノ用ニ供セラレ若クハ供セラルベキコト明白ナル場合ニ於テハ私有財産不可侵ノ原則ノ例外トシテ之ヲ沒收スルコトヲ得ベシ。又現ニ戦争ノ用ニ供セラレザルノミナラズ、供セラルベキコト明白ナラザル場合ニ於テモ將來供セラルベキ危険アルトキハ敵軍ノ使用ヲ妨グル爲メ戦争ノ繼續中ニ之ヲ押收スルコトヲ得ルモノトス。私有財産ヲ尊重セザルベカラザルコトハ陸戦ノ法規慣例ニ關スル規則第四十六條

第一項ニ明定スル所ニシテ、其第二項ニハ「私有財産ハ之ヲ沒收スルコトヲ得ズ」ト規定ス。「尊重セザルベカラズ」ト云ヒ「沒收スルコトヲ得ズ」ト云フ、其ノ意義相一致スト雖モ前者ニ在リテハ毀損、破壊ノ禁止ヲモ包含スルモノナリ。

第三節 占領

占領トハ交戦國一方ノ領地ノ或部分ガ事實上交戦國他方ノ軍隊ノ權力ノ下ニ立チタルヲ謂ヒ、其地域ヲ稱シテ占領地ト云フ。故ニ占領ハ事實上軍隊ノ權力ノ及ブコトヲ要ス。古代ニ在リテハ其初メ實力ヲ要セザル占領即チ占領ノ宣言ノミニ依ル占領ヲ認メタレドモ後ニ至リ漸ク之ヲ否認シ宣言ノ外尙ホ實力ヲ要スト爲シタリ。近世ニ至リテハ宣言ヲ不必要トシ單ニ實力ノミヲ要スルモノト爲ス。從テ占領ノ範圍ハ軍隊ノ實力ノ及ブ範圍ヲ以テ限界トスルコト當然ニシテ、之ヲ定ムルノ必要ハ占領地ニ於ケル占領軍隊ノ權力一定シ占領地ニアラザレバ軍隊ガ特定ノ權利ヲ行使スルコト能ハザルノ差異アルガ故ナリ。陸戦ノ法規慣例ニ關スル規則第四十二條第一項ハ占領ノ何モノタルヤヲ規定シテ曰ク「一地方ニシテ事實上敵軍ノ權力内ニ歸シタルトキハ之ヲ占領セラレタルモノトス」ト、又其第二項ハ其範圍ヲ規定シテ「占

領ハ右權力ヲ樹立シタル且行使シ得ル地域ヲ以テ限トス」ト云ヘリ。

占領セラレタルコトハ主權得喪ノ原因ニアラズ。故ニ占領地ニ於ケル憲法、法律、裁判等ハ依然トシテ其效力ヲ保有ス。然レドモ戰爭ノ必要上占領軍隊ハ被占領地ノ本國ノ法令ヲ行ハズシテ新ニ法令ヲ發布シテ之ヲ施行スルコトヲ得ベシ。蓋シ效力ノ存否ト其行使不行使トハ自ラ別箇ノ問題ナレバナリ。例ヘバ占領地ニ於テ信書祕密ノ保障ヲ破リ國會議員ノ選舉ヲ妨ゲ集會結社ヲ禁ジ或ハ徵兵令ノ施行ヲ中止スルガ如キハ孰レモ戰爭ノ目的ヲ達スル必要上占領軍隊ニ於テ之ヲ爲スコトヲ得ベシ。之ヲ實例ニ徵スレバ一八七七年露土戰爭ニ於テ露ハ「バルカン」半島ニ於ケル土耳其ノ領地ヲ占領シ之ニ新ナル法律ヲ施行セシコトアリ。然レドモ戰爭ニ關係ナキ事項ニ付テハ依然被占領國ノ法令ヲ行ハシムベキモノトス。此點ニ關シテハ陸戰ノ法規慣例ニ關スル規則第四十三條ヲ參照スベシ。占領地ニ於ケル法律既ニ然リ從テ裁判モ亦同ジク然ラザルヲ得ズ。即チ軍事上ノ必要ナキ限ハ被占領國ノ裁判所ヲシテ依然裁判ヲ爲サシメザルベカラズ。裁判ニ關シテハ同規則ニ於テ別ニ規定シタル所ナシト雖モ前掲第四十三條ニ於テ「絶對的ノ支障ナキ限占領地ノ現行法律ヲ尊重シ」ト

アルヨリ觀レバ之ヲ推知スルコト難カラズ。

占領軍隊ハ行政上ノ行動トシテハ原則トシテ如何ナル行爲ヲモ爲スコトヲ得ベシト雖モ例外ナキニアラズ。即チ占領地ノ人民ニ對シ自國人民ト爲ルベキコトヲ強制スルヲ得ザルハ其一ナリ。陸戰ノ法規慣例ニ關スル規則第四十五條ニ「占領地ノ人民ハ之ヲ強制シテ其ノ敵國ニ對シ忠誠ノ誓ヲ爲サシムルコトヲ得ズ」トアル是レナリ。占領地ノ人民ニ對シ其本國ニ抗敵スベキ行爲ヲ爲サシムベカラザルハ其二ナリ。占領地人民ノ生命、身體、名譽、信教ノ自由及其私有財産ヲ侵スベカラザルハ其三ナリ。占領地ノ人民ヲ強制シテ其本國軍又ハ其本國ノ防禦手段ニ付情報ヲ供與セシムルコトヲ得ザルコト其四ナリ。此第四ノ規定即チ陸戰ノ法規慣例ニ關スル規則第四十四條ハ我國ニ於テ留保スル所ナリ。

占領地人民ノ占領軍隊ニ妨害ヲ與ヘタル場合ニ於テハ其者ニ對シテ處罰ヲ加フルコトヲ得ルモ其他ノ者ニ對シ共同責任ヲ負ハシムルコトヲ得ザルハ其五ナリ。同規則第五十條ニ曰ク「人民ニ對シテハ連帶ノ責アリト認ムベカラザル個人ノ行爲ノ爲メ金錢上其他ノ連坐罰ヲ科スルコトヲ得ズ」ト。連坐罰ヲ科シタル實例ハ普佛戰爭

ノ際獨軍「ローレーヌ」ヲ占領シタルトキ「ローレーヌ」ニ「フォンテノワ」ナル小村アリ、此村ノ或人民橋梁ヲ破壊シタルニ、獨軍大ニ怒リ遂ニ村民全體ニ連帶負擔トシテ一千萬「フラン」ノ罰金ヲ科シ尙ホ其村ノ家屋ヲ燒燬シタルコトアリキ。

占領地ノ行政ニ關シ占領地ノ行政官ハ占領セラレタル後ニ於テモ尙ホ官吏トシテ其職務ヲ行フコトヲ得ルモノナリトノ權利ヲ主張スルコトヲ得ベキカ、又其官吏自身ハ占領地ノ行政官トシテ執務スルヲ欲セザル場合ニ占領軍隊ハ之ヲ強フルコトヲ得ルヤノ問題アリ。第一ノ問題ニ付テハ占領地ノ行政官ニ斯ル權利ナシト云ハザルヲ得ズ。何トナレバ占領國ハ占領地ニ對シ自由ニ行政ヲ爲スノ權利アレバナリ。第二ノ問題ニ付テハ余輩ハ積極的斷定ヲ下サントス。何トナレバ租稅ノ徵收ノ如キ其他種々ナル事務ニ付キ從前ノ官吏ヲシテ之ニ當ラシムルヲ以テ便利トスル場合アレバナリ。然レドモ此點ニ付テハ條約ノ規定ナク、又國際法上ノ原則一定セズ或學說ニヨレバ官吏ヲ政務官ト事務官トニ分チ前者ハ占領ト同時ニ必ズ其職ヲ罷ムルモノナレドモ、後者ハ罷ムルト否トハ其自由ナリ。占領國ハ前者ニ對シテハ執務ヲ強制スルコトヲ得ザレドモ後者ニ對シテハ之ヲ強フルコトヲ得ベシ。

次ニ占領地ニ於ケル財産モ亦原則トシテ前章ニ述ベタル法則ニ從フベキモノナレドモ、陸戰ノ法規慣例ニ關スル規定ニ於テ特ニ規定スル所アルヲ以テ、茲ニ之ヲ説述スベシ。其第五十三條第一項ニ曰ク、「一地方ヲ占領シタル軍ハ國ノ所有ニ屬スル現金、基金、及有價證券、貯藏兵器、輸送材料、在庫品、及糧秣其他總テ作戰動作ニ供スルコトヲ得ベキ國有動産ノ外之ヲ押收スルコトヲ得ズ」ト。其第二項ニハ「海上法ニ依リ支配セラルル場合ヲ除クノ外報道ノ傳送又ハ人若ハ物ノ輸送ノ用ニ使セラルル一切ノ機關貯藏兵器廠其他各種ノ軍需品ハ私人ニ屬スルモノト雖モ之ヲ押收スルコトヲ得、但シ均シク作戰動作ニ供スベキ性質ヲ有スルモノニ屬ス。然レドモ平和克復ニ至リ之ヲ還附シ且之ガ賠償ヲ決定スベキモノトス」ト規定ス。占領地ニ於ケル敵國國有不動産ニシテ戰爭ノ用ニ供セラレザル物ニ付キ一言スルノ必要アリ。此種ノ財産ニ對シテハ占領軍隊ハ單ニ利益權ヲ有スルノミ、普佛戰爭ノ際獨軍「ローレーヌ」ヲ占領シ其地ノ森林中ニ存在スル櫛樹ヲ立木ノママ伯林ノ或銀行ニ賣却シタリ。同銀行ハ更ニ之ヲ他人ニ轉賣シ最後ノ轉賣人ヨリ其轉賣契約ノ無效ヲ主張シタリシガ元來占領軍隊ハ此種ノ不動産ニ付キ處分權ヲ有スルモノニアラズ。從

テ第一ノ賣買契約無効ナレバ其後ノ轉賣モ亦無効ナラザルヲ得ズトノ理由ヲ以テ違ニ其契約ハ無効ト決定シタルコトアリ。同規則第五十五條ニ於テ「占領國ハ敵國ニ屬シ且占領地内ニ在ル公共建物、不動産、森林及農場ニ付テハ其ノ管理者及用益權者タルニ過ギザルモノト考慮シ、右財産ノ基本ヲ保護シ且用益權ノ法則ニ依リテ之ヲ管理スベシ」ト規定セルハ即チ此意ヲ示セルモノナリ。

既ニ説述シタルガ如ク、占領地ニ於ケル個人ノ自由及財産ハ之ヲ尊重セザルベカラザルヲ以テ原則トナスト雖モ、一定ノ場合ニ於テハ例外トシテ之ヲ侵スコトヲ得ベシ。斯ル例外ノ場合三アリ曰ク課役曰ク徵發曰ク取立金はナリ。此等ノ權利ハ獨リ占領地ノ敵國人民ニ對シテ行使シ得ルニ止ラズ第三國(中立國)人ノ私有財産ニ對シテモ行使スルコトヲ得ヘシ (*Jus angarial*)。

第一、課役

課役トハ占領軍隊ノ必要上占領地ノ人民ヲ強制シテ使役スルヲ謂フ。最モ普通ニ行ハルル課役ハ輜重ノ運搬、道路ノ修繕及道案内ノ爲ナリ。

占領軍隊ノ必要上ヨリ見レバ強制權ヲ認メザルヲ得ズト雖モ課役權ノ行使ハ全ク

無制限ナルコト能ハズ其制限左ノ如シ。

- 一、占領軍隊指揮官ノ命令ニ出デザルベカラズ。
 - 二、過度ノ勞働ヲ命ズベカラズ。
 - 三、本國ニ對スル作戰動作ニ加ハル義務ヲ負ハシムベカラズ。
 - 四、勞働ニ對シテハ報酬ヲ與ヘザルベカラズ。
 - 五、占領軍隊ノ需要ノ爲ニスルモノナラザルベカラズ。
- 是等ノ制限ハ陸戰ノ法規慣例ニ關スル規則第五十二條第一項及第二項ニ於テ徵發ト併セ規定セリ曰ク「現品徵發及課役ハ占領軍ノ需要ノ爲メニスルニ非ザレバ市區町村又ハ住民ニ對シテ之ヲ要求スルコトヲ得ズ。徵發及課役ハ地方ノ資力ニ相應ジ且ツ人民ヲシテ其本國ニ對スル作戰動作ニ加ルノ義務ヲ負ハシメザル性質ノモノタルコトヲ要ス。右徵發及課役ハ占領地方ニ於ケル指揮官ノ許可ヲ得ルニアラザレバ之ヲ要求スルコトヲ得ズ」ト。

第二、徵發

占領地ニ於ケル個人ノ自由ニ對スル制限ハ第一ニ説述シタル課役ニシテ、第二ニ

下ニ於テ説述スベキハ財産ニ對スル制限ナリ。財産ニ對スルモノハ之ヲ現品ニ對スルモノト金錢ニ對スルモノトニ分ツ。前者ハ茲ニ説述スベキ徵發ニシテ後者ハ次ニ説述スベキ取立金ナリ。

徵發モ亦占領軍隊支持ノ爲メ必要ナルニアラザレバ之ヲ爲スコトヲ得ズ。徵發ヲ爲スニハ物ニ關スル制限ト方法ニ關スル制限トアリ。物ニ關スル制限ハ(一)物夫レ自身ガ該占領軍隊ニ必要ナラザルベカラズ、(二)軍隊ニ必要ナル程度ヲ超越スベカラズ。(三)其土地ノ資力ニ相應セザルベカラズ。例ヘバ小ナル村落ニ對シ短時間内ニ馬一萬頭ノ徵發ヲ命ズルガ如キハ其地方ノ資力ニ相應シタルモノト云フコトヲ得ズ。物夫レ自身ガ軍隊ニ必要ナルモノナラザルベカラザルコトニ關シ一ノ實例アリ。普佛戰爭ノ際獨軍占領地ニ於テ煙草ヲ徵發シ爲ニ後日兩國間ノ爭議トナリ、學者間ニモ亦議論區々タリシガ煙草ハ軍隊ノ元氣ヲ鼓舞スル上ニ於テ大ニカアルモノナレバ軍隊ニ必要ナルモノナリトノ理由ヲ以テ煙草ノ徵發ヲ是認シタリ。果シテ如何ナル者ガ軍隊ニ必要ナルモノナリヤハ箇々ノ事實ニ付キ決スベキモノナリト雖、苟モ軍隊ノ元氣ヲ養フコトヲ得ルモノハ之ヲ徵發スルコトヲ得

レ

ベシ。方法ノ制限トシテハ(一)指揮官ノ命令ニ依ラザルベカラズ。是レ不規律トナルヲ虞レ又責任ノ根本ヲ明カニスルモノナリ。(二)代金ヲ支拂ハザルベカラズ。若シ即時ニ支拂フコト能ハザル場合ニハ物品ノ領收證ヲ交付シ置キ占領中若ハ戰爭終了後之ヲ支拂フベキモノトス。徵發ハ一個人ニ對シテモ之ヲ爲シ又市區町村ニ對シテモ之ヲ爲スコトヲ得ルモノナリ。

以上説明シタル所ニ付テハ前掲第五十二條ヲ參照スベシ。尙ホ同條末項ニ曰ク「現品ノ供給ニ對シテハ成ルベノ即金ニテ之ヲ支拂ヒ、然ラザレバ領收證ヲ以テ之ヲ證明スベシ、且成ベク速ニ之ニ對スル金額ノ支拂ヲ履行スベキモノトス」ト。

第三、取立金

廣義ノ取立金ニ三種アリ。(一)罰金(二)租稅(三)狹義ノ取立金即チ是ナリ。罰金ハ刑罰法適用ノ結果トシテ徵收スルモノニシテ、占領軍隊ハ固ヨリ此權利ヲ有ス。例ヘバ軍隊ノ行動ヲ妨害シタル場合ニ科スルガ如シ。普佛戰爭ノ際獨軍ハ命令ヲ發シテ曰ク、占領地住民ニシテ獨軍ノ行動ヲ妨ゲタル者ハ刑罰ニ處シ尙ホ其者ノ在住セル部落ノ首領ニ對シ罰金ヲ科スト。然レドモ斯ル連坐刑ノ不法ナルハ前既

ニ説述シタル所ノ如シ。占領軍隊ハ占領地ニ對シ一切ノ行政ヲ行フモノナレバ、租稅徵收ノ權アルハ勿論尙ホ狹義ノ取立金即チ軍隊維持ノ爲メ必要ナル金錢ヲ徵收シ得ルハ既ニ説述シタル所ナリ。陸戰ノ法規慣例ニ關スル規則ニ於テモ亦之ヲ認ム其第四十八條第四十九條ヲ參照スベシ。

取立金ヲ爲スニモ亦方法ノ制限アリ第五十一條ニ曰ク

取立金ハ總テ總指揮官ノ命令書ニ依リ且其ノ責任ヲ以テスルニ非ザレバ之ヲ徵收スルコトヲ得ズ。

取立金ハ成ルベク現行ノ租稅賦課規則ニ依リ之ヲ徵收スベシ。

要スルニ(一)指揮官ノ命令書ヲ以テスベキコト(二)成ルベク現行ノ租稅賦課規則ニ從フベキコト(三)領收證ヲ交付スベキコトヲ必要トスルナリ。

第四節 攻圍砲擊

戰爭既ニ適法行爲ナリトセバ攻圍及砲擊亦適法ナラザルベカラズ。然レドモ現今之ニ關シテ一ノ制限アリ、陸戰ノ法規慣例ニ關スル規則第二十五條ハ曰ク「防守セザル都市村落、住宅又ハ建物ハ如何ナル手段ニ依ルモ之ヲ攻撃又ハ砲擊スルコトヲ

得ズ」ト。故ニ防守セザル場所ヲ攻撃又ハ砲擊スルハ違法ナリ。然レドモ單ニ之ヲ攻圍スルハ禁ズル所ニアラズ。斯ノ如ク防守セザル場所ヲ攻撃又ハ砲擊スルコトヲ禁ズルハ近時ニ於ケル戰爭ノ目的ト相容レザルニ因ル。蓋現時ニ於ケル戰爭ノ目的ハ敵國ノ主張ヲ狂グルニ在リ、其手段トシテ敵國ノ交戦力ヲ殺グノ方法ヲ採ルナリ。然ルニ防守セザル場所ヲ攻撃若ハ砲擊スルハ徒ニ戰爭ニ關係ナキ平和的人民ヲ苦ムルノミニシテ毫モ交戦力ニ關係アラザレバナリ。此事ニ關シテ千八百七十四年「ブリエクセル」宣言第十五條及萬國國際法學會決議第三十二條ニ於テモ明言スル所ナリ。

斯ノ如ク防守セザル場所ヲ攻撃又ハ砲擊スルハ國際公法ノ許サザル所ナリト雖モ、防守アル場所ヲ攻撃若ハ砲擊スルハ固ヨリ禁止スル所ニアラズ。是ニ於テカ問題アリ即チ先ヅ被攻圍地ニ於ケル私有財産ハ之ヲ攻撃スルヲ得ザルカ。此問題ニ付テハ異論アリト雖モ今日ノ實際ニ於テ之ヲ攻撃スルコトヲ得ルモノトナス。其理由トスル所ハ私有財産ノミヲ害セズシテ攻圍地ヲ攻撃スルコトハ事實上不能ノ業ニ屬スルノミナラズ、斯クスルトキハ被攻圍地ノ軍隊ノ退却又ハ降服ヲ速ナラシムルニ

效アリト云フニ在リ。次ニ起ルハ被攻圍地ニ於ケル公有財産ニ付テノ問題ナリ。是等戰爭ニ關係ナキ財産例ヘバ博物館、病院、社寺、學校等ノ如キハ之ニ見易キ一定ノ目標ヲ付シ之ヲ攻圍軍ニ通知スルトキハ攻撃又ハ砲撃ヲ爲スヲ得ザルモノトス。尙ホ傷病者ノ收容所ノ如キモ以上ノ手續ヲ履行スルトキハ之ヲ不可侵ノモノトス。尤モ此等ノモノト雖モ、現ニ戰爭ノ用ニ供スルトキハ斯ル不可侵權ヲ有セザルコト論ヲ俟タズ。陸戰ノ法規慣例ニ關スル規則第二十七條ニ曰ク

攻圍及砲撃ヲ爲スニ當リテハ宗教、技藝、學術及慈善ノ用ニ供セラルル建物歴史上ノ紀念建造物、病院並病者及傷者ノ收容所ハ同時ニ軍事上ノ目的ニ使用セラレザル限之ヲシテ成ルベク損害ヲ免レシムル爲必要ナル一切ノ手段ヲ執ルベキモノトス。

被圍者ハ看易キ特別ノ徽章ヲ以テ右建物又ハ收容所ヲ表示スルノ義務ヲ負フ、右徽章ハ豫メ之ヲ攻圍者ニ通告スベシ。

一八七〇年一八七一年普佛戰爭ノ際獨軍ガ巴里ヲ攻圍シ之ヲ砲撃スルニ當リ學生二人ヲ斃シタルコトアリ、又「ストラスブルヒ」ヲ攻圍砲撃シテ圖書館ヲ燒キタルコ

トアリ。然レトモ是レ故意ニ出デタルニ非ザルガ故ニ違法ニアラズト辯解セリ。

攻圍軍指揮官ハ攻圍地ト他地方トノ一切ノ交通ヲ遮斷スルコトヲ得。何トナレバ若シ之ヲ許ストキハ被攻圍軍ノ軍情等ヲ通知スルノ虞アレバナリ。茲ニ問題トナルハ攻圍地ニ對シ外部ヨリ衣類、食物等ノ供給ヲ爲スハ妨ナキヤ否ヤノ問題ナリ。或學說ニ依レバ斯ル物品ノ供給ハ之ヲ許スベシト云ヘリ。然レドモ攻圍軍ハ斯ル義務ヲ負フモノニアラズ、縱令之ガ爲メ攻圍地ニ於ケル平和的人民中餓死スル者アルニ至ルモ尙ホ且之ヲ許スノ義務ナシ。何トナレバ斯ル口實ノ下ニ被攻圍地ノ軍隊ニ對シ糧食、被服、燃料等ヲ供給スルノ虞アレバナリ。

攻圍軍ハ攻圍地ト他地方トノ間ニ於ケル一切ノ通信ヲ禁止スルノ權利ヲ有ス。其通信者及受信者ノ敵國人ナルト中立國人ナルトハ毫モ問フ所ニアラズ。蓋シ若シ之ヲ許ストキハ援兵等ノ來ルアリテ、攻圍軍ニ不利益ヲ來スコトアレバナリ。此事ニ關シ一ノ實例アリ。普佛戰爭ノ際獨軍ヲ攻圍セシトキ巴里ニ駐劄セル英國大使本國ニ向ヒ電報ヲ發セントセシガ獨軍ノ妨害スル所トナリ、遂ニ英國ニ紛議ヲ生ジタリ。英國ハ曰ク、自國ノ使節ハ佛國ニ於テ一切ノ治外法權ヲ有ス、從テ攻圍軍ハ英國使

節ノ行爲ヲ妨害スルノ權利ナシト。獨逸ハ之ヲ駁シテ曰ク、英國ノ使節ガ斯ル特權ヲ有スルハ平時ニ於テ然ルノミ、現ニ攻圍地ニ在ルトキハ攻圍軍ノ權力ノ下ニ立タザルベカラズ、從テ一切ノ通信ハ攻圍軍自由ニ之ヲ禁止スルコトヲ得ト。又曰ク右ノ治外法權ハ佛國ニ對シ主張シ得ベキモ、獨逸ニ對シ主張シ得ベキモノニアラズト。

攻圍ハ其目的ヲ達シタルトキ又ハ攻圍軍ガ任意ニ攻撃ヲ解キタルトキハ又攻圍軍ガ被攻圍軍ノ爲メニ擊退セラレタルトキニ於テ解除セラルルモノトス（原狀回復）。

攻圍ガ其目的ヲ達シタルガ爲メ解除セラルル場合ハ陷落若クハ降伏ナリ。降伏ハ被攻圍軍司令官ト攻圍軍司令官トノ間ニ於ケル降伏規約ニ依リテ之ヲ爲ス。同規則第三十五條ニ降伏規約ニ關シ規定セリ、曰ク「締約當事者間ニ協定セラルル降伏規約ニハ軍人ノ名譽ニ關スル例規ヲ參酌スベキモノトス、降伏規約一旦確定シタル上ハ當事者雙方ニ於テ嚴密ニ之ヲ遵守スベキモノトス」ト（千九百五年即チ明治三十八年一月五日旅順口開城規約第七條參照）。

降伏規約ハ降伏軍隊司令官ノ權限内ニ於テ爲シタルモノニアラザレバ其效力ナシト雖モ、苟モ其ノ權限内ニ於テ爲シタル場合ニ於テハ本國ハ必ズ之ヲ承認セザルベカラズ。但本國ガ國內法上不當ナリトシテ降伏ノ事ニ當リタル者ヲ處分スルハ勿論國際公法上ノ問題ニアラズ。

第五節 害敵手段

交戰國ハ敵ノ戰鬥力ヲ滅殺センガ爲メニ無制限ノ方法ヲ執ルコトヲ得ルモノニアラズ。外包硬固ナル彈丸ニシテ其ノ外包中心ノ全部ヲ蓋包セズ若ハ其ノ外包ニ截刻ヲ施シタルモノノ如キ人體内ニ入テ容易ニ開展シ又ハ扁平トナルベキ彈丸ノ使用ヲ禁ズルガ如キ、窒息セシムベキ瓦斯竝ニ有毒質ノ瓦斯ノ撒布ヲ唯一ノ目的トスル投射物ノ使用ヲ禁ズルガ如キハ皆無益ノ苦痛ヲ與ヘザラシメンガ爲メニ設ケラレタル約定ナリ。陸戰ノ法規慣例ニ關スル規則第二十三條ハ左ノ件々ヲ禁止セリ。

- 一 毒又ハ毒ヲ施シタル兵器ヲ使用スルコト
- 二 敵國又ハ敵軍ニ屬スル者ヲ背信ノ行爲ヲ以テ殺傷スルコト
- 三 兵器ヲ捨テ又ハ自衛ノ手段盡キテ降ヲ乞ヘル敵兵ヲ殺傷スルコト
- 四 助命セザルコトヲ宣言スルコト
- 五 不必要ノ苦痛ヲ與フベキ兵器投射物其ノ他ノ物質ヲ使用スルコト

- 六 軍使旗、國旗其他ノ軍用ノ標章、敵ノ制限及「ジエネヴァ」條約ノ特殊徽章ヲ擅ニ使用スルコト
- 七 戰爭ノ必要上萬已ムヲ得ザル場合ヲ除クノ外敵ノ財産ヲ破壊シ又ハ押收スルコト
- 八 對手當事國國民ノ權利及訴權ノ消滅、停止又ハ裁判上不受理ヲ宣言スルコト

第六章 海戰ニ關スル法規

第一節 財産ニ關スル法規

第一款 敵財産

海戰ニ於テハ敵ノ財産ハ國有ナルト公有ナルト私有ナルトヲ問ハズ又其用方ノ戰爭ノ爲ニ供セラルルモノナルト否トヲ問ハズ盡ク之ヲ沒收スルコトヲ得ベシ。中立船内ニ在ルトキト雖モ、戰爭ノ用ニ供セラルベキ敵ノ財産ハ沒收セラル。巴里宣言第二ニ「局外中立國ノ旗章ヲ掲グル船舶ニ搭載セル敵國ノ貨物ハ戰時禁制品ヲ除クノ外之ヲ拿獲スベカラザルコト」トアル是ナリ。敵ノ財産ハ之ヲ分チテ敵貨及ビ敵

原則
中立
巴里宣言

船ト爲ス。

第一項 敵貨

敵貨トハ敵人ノ所有權ノ下ニ在ル貨物ヲ云フ（一九〇九年倫敦宣言第五八條）。敵船内ノ貨物ノ中立ナルヤ否ヤ確乎タル證明ヲ得ザル場合モ亦之ヲ敵貨ト推定ス（海戰法規第二〇條倫敦宣言第五九條）。此問題ニ附隨シテ生ズルハ敵人トハ何ゾト云フコトナリ。此問題ニ付テハ大陸主義ト英國主義トノ二アリ。英國主義ニ依ルトキハ人ノ國籍ノ如何ハ措テ問ハズ敵國ニ住所ヲ有スル者ハ悉ク敵人ナリトス。之レニ反シテ大陸主義ニ於テハ人ノ住所ノ何レニ在ルヲ問ハズ敵國ノ國籍ヲ有スル者ヲ以テ敵人トナシ、從ツテ其者ノ所有スル貨物ヲ敵貨トスレナリ。明治三十七年ノ我國ノ海上捕獲規程ハ其第三條ニ於テ

所有權
何人
住所主義
國籍主義

人ノ敵性ハ其國籍ノ如何ニ拘ラズ現ニ住所ヲ有スル國ニ屬スルモノトス
ト規定シタリ。然ルニ大正三年ノ海戰法規第十九條ハ住所主義ヲ捨テテ國籍主義ヲ採リ左ノ如ク規定ス。二重住所ノ場合ノ規定ナキコト及二重國籍ノ二者ガ共ニ敵國人ニアラザル場合ノ規定ヲ缺キタルハ缺點ナリ。

敵船内ニ在ル貨物ノ中立性ヲ有スルヤ又ハ敵性ヲ有スルヤハ其ノ所有者ノ國籍ノ中立ナルヤ又ハ敵ナルヤニ依リ之ヲ定ム所有者ガ二重ノ國籍ヲ有スル場合ニハ其ノ住所ノ中立國ニ在ルヤ又ハ敵國ニ在ルヤニ依リ之ヲ定ム
 現ニ敵貨ニアラザルモ、或ル一定ノ場合ニ於テ之ヲ敵貨ト看做スベキ場合アリ。
 明治三十七年海上捕獲規程第九條ハ左ノ如ク規定ス。

左ニ掲グル載貨ハ前條ノ規定ニ拘ラズ總テ之ヲ敵貨トス

- 一 開戦前開戦ヲ豫期シ又ハ開戦中敵國若ハ中立國ニ住所ヲ有スル者又ハ其委託ヲ受ケタル者ヨリ敵國、敵人又ハ其委託ヲ受ケタル者ニ對シ發送スル載貨
 - 二 開戦前開戦ヲ豫期シ又ハ開戦中敵國又ハ敵人ヨリ敵國又ハ中立國ニ住所ヲ有スル者ニ所有權ヲ移轉セラレタル載貨ニシテ其所有權ノ移轉ニ關シ善意且完全ナル證明ナキモノ
- 載貨ニシテ之ヲ塔載スル船舶ノ航海中所有權ヲ移轉セラレ未ダ現實ノ引渡ナキ場合ニ於テハ其所有權ノ移轉ハ善惡且完全ナラザルモノト看做ス
- 船舶所有者ガ開戦後貨物ノ所有權ヲ移轉シタル場合ニ付テハ海戦法規第二十一條

ハ左ノ如ク規定セリ(倫敦宣言第六〇條參照)。

敵船舶内ニ在ル貨物ノ敵性ハ戦争開始後其ノ航海中ニ所有權ノ移轉ヲ行フトモ其ノ到達地ニ著スル迄ハ猶存續スルモノトス
 現所有者タル敵人ノ破産シタル場合ニ於テ前所有者タル中立人ニシテ拿捕以前ニ該貨物ニ對シテ合法ノ取戻權ヲ行使シタルトキハ該貨物ハ再ビ中立性ヲ取得スルモノトス

第二項 敵 船

敵船ハ戦争行爲ニ加ハリタルト否トニ論ナク之ヲ沒收シ得ルヲ原則トス。茲ニ於テカ敵船ノ何物タルヤヲ決定スルノ必要アリ。海戦法規第十八條第一項ニ左ノ規定ヲ存ス(倫敦宣言第五七條參照)。

船舶ノ中立性ヲ有スルヤ又ハ敵性ヲ有スルヤハ其ノ掲揚ノ權利ヲ有スル國籍ニ依リ之ヲ定ム

例外トシテ「中立船ニシテ敵國政府ノ特許ヲ得テ敵國ガ平時ニ於テ他國船ニ禁止スル航海ニ從事スルモノハ之ヲ敵船ト看做ス」(同條第二項)。

敵船ガ(一)開戦前(二)開戦後ニ於テ國籍ヲ中立國ニ變更シタル場合ノ規定ハ海戦法規第二十二條第二十三條(倫敦宣言第五五條第五六條)ヲ見ルベシ。開戦前ノ移轉ハ之ヲ有効トスレドモ敵船タル性質ヨリ生ズル結果ヲ免レンガ爲移轉ヲ爲シタルコトヲ立證セバ其移轉ヲ無効トス。開戦後ノ移轉ハ無効トスレドモ其移轉ガ敵船タル性質ヨリ生ズル結果ヲ免レンガ爲行ハレタルモノニアラズト立證スルトキハ有効トス。絶對ニ無効トスル場合ハ左ノ三個ナリ。(一)移轉ニシテ船舶航行中又ハ其封鎖港内ニ在ル間ニ行ハレタル場合(二)移轉ニシテ買戻又ハ返還ノ條件ヲ有スル場合(三)國籍掲揚ノ權利ニ關シ其ノ本國法ニ規定スル條件ヲ遵守セザル場合中立船ニシテ左ノ一ニ該當スルトキハ之ヲ拿捕スベク、且之ヲ敵船ト同一ニ取扱フコトヲ得ベシ(海戦法規第八〇條)。

- 一 該船舶ニシテ直接ニ戰鬪行爲ニ加ハル場合
- 二 該船舶ニシテ敵國政府ニ於テ該船内ニ乗組マシメタル代理人ノ命令又ハ監督ヲ受クル場合
- 三 該船舶ニシテ全部敵國政府ノ爲ニ備入レラレタル場合

四 該船舶ニシテ現ニ且專ラ敵國軍隊ノ輸送又ハ敵ヲ利スル爲情報ノ傳達ニ從事スル場合

敵船ハ之ヲ拿捕シ捕獲審檢所ノ檢定ヲ以テ之ヲ沒收ス、例外トシテ敵船ナルニ拘ラズ拿捕、沒收ヲ免ルル場合左ノ如シ。

第一 宗教、學術又ハ博愛ノ任務ヲ帶ブル敵船ニシテ專ラ其目的トスル任務ノミニ從事スルコト明ナルトキ(海戦法規第二十八條、海戦ニ於ケル捕獲權行使ノ制限ニ關スル條約第四條)

第二 專ラ沿岸漁業又ハ地方的小航海ニ用ヒラルル敵船(海戦法規第二十五條、海戦ニ於ケル捕獲權行使ノ制限ニ關スル條約第三條)

第三 千九百七年「ジエネヴァ」條約ヲ海戦ニ應用スル條約ニ定メタル特殊ノ船舶

第四 軍使船

第二款 敵以外ノ財産特ニ中立財産

中立船、中立貨ト雖モ拿捕、捕獲ノ目的物トナルコトアリ。

第一項 軍事的幫助ヲ爲ス船舶

第一 中立船ニシテ敵國軍隊ニ編入セラレタル乗客ヲ輸送スル目的ヲ以テ又ハ敵ヲ利スル爲情報ヲ傳達スル目的ヲ以テ特ニ航海スル場合

第二 船舶所有者、船舶全部ノ備船者又ハ船長ニ於テ情ヲ知リテ敵ノ軍隊ノ一部又ハ敵ノ作戦行動ニ對シ航海中直接ノ幫助ヲ與フル一人若ハ數人ヲ輸送スル場合

第三 本節第一款第二項ノ(一)(二)(三)(四)ノ場合

第二項 臨檢ニ抵抗スル船舶

船舶ガ停船、臨檢、搜索及拿捕ノ權利ノ合法ナル行使ニ對シ強力ヲ以テ抵抗スルトキ(海戦法規第九五條第九六條)。

第三項 郵便信書

中立船又ハ敵船内ニ在ル中立者又ハ交戦者ノ郵便信書ハ其性質ノ公私ヲ問ハズ不可侵トス。但シ封鎖港ニ宛テ又封鎖港ヨリ來リタル信書ニハ之ヲ適用セズ郵便信書ノ不可侵ハ之ヲ搭載スル中立郵便船ニ及ハズ、但シ該郵便船ニ對スル臨檢搜索ハ成ルベク、寛大且迅速ニ必要アル場合ニ限り行フコトヲ要ス(海戦法規第百八條第百九條第百十條第百十一條、海戦ニ於ケル捕獲權行使ノ制限ニ關スル條約第一條第二

條)。

第四項 被護送船

中立船ガ交戦國一方ノ軍艦ヨリ護送セララルトキハ交戦國他方ハ之ヲ拿捕スルコトヲ得ベシ。中立船ガ他中立國ノ軍艦ヨリ護送セララルトキハ交戦國双方ハ之ヲ拿捕スルコトヲ得ベシ。中立船ガ當該中立國(自國)軍艦ヨリ護送セララル場合ニ限り交戦國軍艦ハ之ヲ拿捕スルコトヲ得ズ。此事ニ關スル海戦法規ノ規定左ノ如シ(倫敦宣言第六一條第六二條參照)。

第九十七條 中立船ニシテ其ノ本國軍艦ノ護送ヲ受クルモノニ對シテハ護送軍艦指揮官ガ之ヲ臨檢セントスル帝國軍艦指揮官ノ請求ニ依リ其ノ船舶ノ性質及載貨ニ付テ臨檢ニ依リテ知ルヲ得ベキ一切ノ情報ヲ書面ヲ以テ通知シタルトキハ臨檢及搜索ヲ行フコトヲ得ズ

第九十八條 帝國軍艦指揮官ニシテ護送軍艦指揮官ノ欺カレ居ルコトヲ疑フコトアルトキハ嫌疑ノ旨ヲ護送軍艦指揮官ニ通知スベシ此ノ場合ニ於テ檢證ヲ行フハ護送軍艦ニ限ルモノトス但シ護送軍艦指揮官ニ於テ該檢證ニ付テ帝國軍艦指

揮官ノ助力ヲ請求スルトキハ麾下士官ヲ派遣シテ之ニ立會ハシムルコトヲ得前
項ノ檢證ノ結果ハ護送軍艦ニ於テ之ガ調書ヲ作り其ノ謄本一通ヲ帝國軍艦士官
ニ交付スルモノトス

第五項 戰時禁制品

（任り）

戰時禁制品ハ（第一）其貨物ノ用方（第二）其貨物ノ仕向地ニ依リテ決定セラルベキ
モノナリ。貨物ノ性質ヨリ見レバ其物ガ戰爭ノ用ニ供セラルベキモノナルコトヲ要
シ貨物ノ仕向地ヨリ見レバ敵地若ハ敵ノ陸海軍又ハ敵ノ行政廳ナルコトヲ要ス。敵
軍ノ占領地ハ之ヲ敵地ト同一視ス。從來ノ例ニヨレバ戰時禁制品ヲ絕對的禁制品及
條件付禁制品トナス。倫敦宣言ハ之ヲ左ノ三種ニ分ツ。

第一 絕對的禁制品（同宣言第二二條）

第二 條件付禁制品（同第二四條）

第三 禁制品ト爲スコトヲ許サザルモノ（同第二八條第二九條）

海戰法規ハ亦絕對的、條件付ノ二種ニ分ツ。絕對的戰時禁制品ハ左ノ物件ニシテ其
仕向地ガ敵國ノ領土若クハ占領地又ハ敵國軍隊ニ仕向ケラレタリト認ムルモノナリ

（海戰法規第五五條第五八條、倫敦宣言第二二條第三〇條）。

- 一 一切ノ武器（狩獵用武器ヲ含ム）及其ノ組成品タルコト明ナルモノ
- 二 一切ノ彈丸裝藥彈藥包及ビ組成品タルコト明ナルモノ
- 三 特ニ戰爭用トシテ製造セラレタル火藥及爆發物
- 四 砲架、彈藥車、前車、軍用運搬車、野戰鍛冶器及其ノ組成品タルコト明ナル
モノ

- 五 軍用タルコト明ナル被服及武裝具
- 六 軍用タルコト明ナル一切ノ馬具
- 七 特ニ軍用トシテ製造セラレタル工兵器材（倫敦宣言ニ無シ）
- 八 戰爭ノ用ニ供スルヲ得ベキ乗用、輓用、駄用ノ獸類
- 九 陣營具及其ノ組成品タルコト明ナルモノ
- 十 甲鐵飯
- 十一 軍艦及戰鬪用艇舟並特ニ上記艦艇ニ限り使用シ得ベキコト明ナル組成品
- 十二 飛行機、飛行船、氣球其ノ他一切ノ航空機及其ノ組成品タルコト明ナルモノ

ノ竝航空機用ニ供セラルルモノト認ムベキ屬具、物件及材料（倫敦宣言ハ之ヲ條件付禁制品ノ内ニ入レタリ）

十三 兵器彈藥製造ノ爲又ハ陸海軍用ノ武器及材料ノ製造修理ノ爲專ラ作製セラレタル機械器具

●條件付戰時禁制品ハ左ノ物件ニシテ敵國軍隊又ハ行政廳ノ使用ニ仕向ラレタリト認ムベキモノナリ。但シ行政廳ニ仕向ケラレタル場合ニ於テ此等ノ物件及材料ハ事實上該戰爭ノ爲ニ使用セラルベキモノニ非ザルコトヲ諸般ノ情況ニ依リ立證セラレタルトキハ此限ニ在ラズ（海戰法規第五六條第六一條、倫敦宣言第二四條第三三條）。

- 一 糧食
- 二 獸類ノ飼料用ニ適スル芻秣及穀類
- 三 軍用ニ適スル被服、被服用織物及靴類
- 四 金銀貨幣、地金銀及紙幣
- 五 戰爭ノ用ニ供スルヲ得ベキ一切ノ車輛及其ノ組成品
- 六 一切ノ船舶及艇舟、浮船渠、船渠ノ部分竝其ノ組成品

七 鐵道ノ固定及運轉用材料竝電信、無線電信及電話ノ材料

八 燃料及機械潤滑用材料

九 特ニ戰爭用トシテ製造セラレタルモノニ非ザル火藥及爆發物

十 刺アル鐵線及其ノ架設又ハ切斷用ニ供スベキ機械

十一 蹄鐵及蹄鐵用材料

十二 輓用及鞍用ノ物件

十三 雙眼鏡、望遠鏡、「クロノメートル」及各種ノ航海用具

以上ノ物件ガ敵國軍隊又ハ行政廳ノ使用ニ仕向ケラレタルト推定セラルベキ場合左ノ如シ（海戰法規第六二條倫敦宣言第三四條）。

- 一 敵國官憲ニ仕向ケラレタルトキ
- 二 敵國ニ在住シ此種ノ物件又ハ材料ヲ敵國政府ニ供給スルコト著名ナル商人ニ仕向ケラレタルトキ
- 三 敵國政府ノ代理人又ハ敵國政府ノ監督ノ下ニ在ル商人若ハ其ノ他ノ人ニ仕向ケラレタルトキ

四 敵ノ防備アル場所又ハ敵國軍隊ノ策源地若ハ補給地タル其ノ他ノ場所ニ仕向ケラレタルトキ

本來戰時禁制品タルベキモノト雖モ左ノ場合ニ於テハ之ヲ戰時禁制品トナスコトヲ得ズ(海戰法規第五七條倫敦宣言第二九條)。

一 専ラ病者傷者ノ看護用ニ供スベキ物件及材料、但シ軍事上重大ナル必要アル場合ニ於テハ此等ノ物件及材料ニシテ敵國ノ領土若ハ占領地又ハ敵國軍隊ニ仕向ケラレタルトキニ限り賠償ノ義務ヲ負ヒテ之ヲ徵發スルコトヲ得

二 船舶ノ自用ニ供スベキ船内ニ在ル物件及材料並航行中該船舶ノ乘員及船客ノ用ニ供スベキ物件及材料

禁制品ニ付キ問題ヲ生ズルハ貨物ノ仕向地ハ敵地若ハ敵ノ陸海軍ニアラザルモ一旦敵地ニ非ル地ニ寄港シタル後敵地若クハ敵ノ陸海軍ニ到達スベキ場合ニ於テ第一ノ航海中即チ發航地ヨリ敵地ニ非ル港ニ到ル途中ニ於テ之ヲ拿捕スルコトヲ得ルヤ否ヤノ問題ナリ。斯ル場合ニ於テハ其第一ノ航海ト後ノ航海トハ連續セルモノト看做スコトヲ得ベキヲ以テ、第一ノ航海中ニ於テモ尙ホ之ヲ捕獲スルコトヲ得ベシト

スルコト從來一般ニ認めラレタル所ニシテ、其搭載セル貨物ヲ中立港ニ於テ陸揚スルト否トハ毫モ關セザルナリ。倫敦宣言ハ絕對的戰時禁制品ニノミ連續輸送主義ヲ認めタリ。次ニ問題トナルハ中立港ニ於テ載貨ヲ他船ニ積替ヘンルコト明白ナル場合ナリ。此場合ニ於テモ之ヲ拿捕スルコト當然ナリ。何トナシテ均シク連續輸送タルコトヲ失ハザレバナリ。次ニ中立港ヨリ再ビ航海ヲ繼續スルコトナク陸上ヲ經由シテ敵地ニ輸送スル場合ハ連續航海ノ名義ヲ以テハ之ヲ捕獲スルコトヲ得ザルベシ。何トナレバ是レ連續セル航海ニハ非ザレバナリ。倫敦宣言ハ連續航海ナル文字ヲ用フルコトナクシテシカモ此場合ヲモ絕對的戰時禁制品タル物件ニ限り禁制品ト見ルベキコトヲ定メ海戰法規ハ第五十八條ニ於テ

第五十五條ノ物件及材料ニシテ其ノ敵國ノ領土若ハ占領地又ハ戰時軍隊ニ仕向ケラレタルモノト認めベキトキハ其ノ直接ニ輸送セララルト又ハ轉載若ハ陸路ニ依リ輸送セララルトヲ問ハズ之ヲ戰時禁制品ト認メテ拿捕ス。ト規定シ絕對的戰時禁制品ニ付テノミ此主義ヲ認めタリ。

戰時禁制品ニ對スル制裁ニ關シ禁制品其物ヲ沒收スルコトハ國際公法ノ原則ナ

リ。只戰時禁制品ヲ搭載スル船舶ニ對スル制裁如何、戰時禁制品ト共ニ同一船舶内ニ搭載セラルル非禁制品ニ對スル制裁如何ノ二個ノ問題ニ付テノミハ種々ノ異議アリキ。

戰時禁制品ヲ搭載スル船舶ニ對スル制裁モ亦沒收ナリ。然レドモ單ニ戰時禁制品ヲ搭載セルノミヲ以テハ之ヲ沒收スベカラズ。之ヲ沒收スベキ場合ノ一ハ其船舶ノ所有者若ハ船長(船長ト船舶所有者トハ同一視セラル)ガ自己ノ船舶ニ戰時禁制品ヲ搭載セルコトヲ知レル場合ニシテ、禁制品ヲ搭載セルコトヲ知ルトハ禁制品ヲ禁制品ニアラザルカノ如ク裝ヒタル場合ト否トヲ問ハズ之ヲ搭載セルコトヲ知ルヲ以テ足ルノ意ナリ。斯ル場合ニハ其船舶ヲ沒收ス。其二ハ禁制品ノ所有者ト船舶所有者若ハ船長ト同一人ナル場合ニシテ此場合ニモ亦其船舶ヲ沒收ス。蓋斯ル船長若ハ船舶所有者ハ惡意アル者ト看做スコトヲ得ベケレバナリ。而シテ此場合ニ於テハ反對ノ證明ヲ許サザルモノトナス。

以上二箇ノ場合ハ大陸ト英國ト主義同一ナリシト雖モ次ノ場合に付テ差異アリ。即チ其三ハ船舶ニ搭載セル戰時禁制品多量ナルトキハ船長若ハ船舶所有者ノ善意ナ

ルト惡意ナルト又其所有者ガ同一ナルト否トヲ問ハズ其船舶ヲ沒收スベキモノトナス。是レ從來ノ大陸主義ニシテ英國ハ初ニ於テ之ヲ認メザリシナリ。大陸主義ニ於テ船舶ニ搭載セル禁制品ガ多量ナルトキハ其船舶ヲ沒收スベキモノトナシタレドモ其量ノ程度ハ必シモ一ナラズ或ハ搭載セル載貨ノ全部ガ禁制品タルコトヲ要ストシタリ。露西亞、獨逸、丁抹、伊太利等はナリ。或ハ全載貨ノ大部分ガ禁制品ナルトキニ限り船舶ヲ沒收スベシトセリ。又或ハ佛國ノ如キハ一八七〇年ノ法律ヲ以テ全載貨ノ四分ノ三以上ガ禁制品ナルトキハ船舶ヲ沒收スベシト定メタリ。倫敦宣言ハ禁制品ガ全貨物ノ二分一以上ナルトキハ船舶ヲ沒收スベシト定メ而シテ其所謂二分ノ一ナルコトノ標準ハ價格、重量、容積、運賃ノ内何レニテモ可ナリトセリ(倫敦宣言第四〇條)。我ガ海戰法規ハ倫敦宣言ニ遵據シ第七十二條ニ左ノ如ク規定セリ。

戰時禁制品ヲ輸送スル船舶ハ該戰時禁制品ニシテ其ノ價格重量容量又ハ運賃上全載貨ノ半數以上ニ上ル場合ニ限り沒收セララルベキモノトス

嘗テ戰時禁制品ヲ輸送シタルモ現ニ輸送シツツアルニ非ザレバ其船舶ヲ沒收スル

コトヲ得ズ(倫敦宣言第三八條海戰法規第六五條)。

戰時禁制品ト同載セラレタル非戰時禁制品ハ之ヲ如何ニスベキヤヲ說述スベシ。此問題ニ付テモ從來大陸主義ト英國主義トハ相異リタリ、英國主義ハ一名傳染主義又ハ感染主義トモ云フ。此主義ニ依ル時ハ、禁制品ノ所有者ノ有ニ屬スル非禁制品ハ同ジク之ヲ沒收スベキモノトナス。大陸主義ハ之ニ反シ斯ル非禁制品ノ沒收ヲ認メズ。明治三十七年ノ我捕獲規程ハ英國主義ヲ採リ其第四十三條第一項ニ於テ「戰時禁制品及其所有者ニ屬スル載貨ハ之ヲ沒收ス」ト規定シタリ。蓋所有者同一ナレバ其性質感染スト云フニ在リ。然レドモ所有者同一ナレバ禁制品ニ感染ストノ理由甚ダ曖昧ナリ。倫敦宣言ハ此點ニ付キ英國主義ヲ採用シ(第四十二條)、我ガ海戰法規第七十四條モ亦同ジク「戰時禁制品ノ所有者ニ屬シ且同一船舶内ニ在ル貨物ハ沒收セラルベキモノトス」ト定メタリ。

戰時禁制品ヲ輸送スル船舶ニシテ拿捕及沒收ノ免除ヲ受クベキ場合アリ、我ガ海戰法規ニ規定セル場合ヲ綜合スレバ左ノ如シ。

一 該船舶ガ開戰ノ事實ヲ知ラザルトキ但此種ノ船舶ハ之ヲ抑留スルコトヲ得

二 該船舶ガ其載貨ニ對シ適用スベキ戰時禁制品ノ宣言ヲ知ラザリシトキ

三 船長ガ戰爭ノ開始又ハ戰時禁制品ニ關スル宣言ヲ知リタルモ未ダ戰時禁制品ヲ陸揚スルヲ得ザリシ場合

四 戰時禁制品輸送ノ故ヲ以テ停船ヲ命ゼラレタルモ其分量ノ關係上沒收ヲ免ルル船舶ニシテ船長ガ帝國軍艦ニ對シ戰時禁制品ヲ引渡スベシト申出デタルトキ戰時禁制品、戰時禁制書ナル名稱及實質ハ倫敦宣言ニモ我海戰法規ニモ之ヲ認メズ。明治三十七年ノ海上捕獲規程ニ於ケル此二者ニ關スル規定左ノ如ク、制裁トシテハ禁制人ハ之ヲ俘虜トシ、禁制書ハ之ヲ沒收シ、禁制人禁制書ヲ搭載スル船舶及其ノ船舶所有者ニ屬スル載貨ハ之ヲ沒收スベシトナセリ。

第十一條 戰時禁制人トハ敵兵其他ノ者ニシテ敵國ノ軍事ニ從フ爲メ輸送セラルル者ヲ謂フ

第十二條 戰時禁制書トハ敵國政府ノ官吏其公務上往復スル一切ノ公文書類ヲ謂フ

第六項 封 鎖

封鎖トハ戦争必要權ノ實行上交戰國ノ一方カ他方ノ港灣、河口、海岸ニ於ケル交通ヲ遮斷スルヲ謂フ。

封鎖ヲ爲スコトヲ得ザル場所トシテ明ニ認めラルル所ハ、

- 一 中立國ノ港灣、河口、海岸
- 二 國際河流

三 敵國ノ領域内ト雖モ交戰國雙方ノ合意ヲ以テ中立トナシタル港灣等

是ナリ。茲ニ問題トナルハ自國ノ港灣ヲ封鎖スル事ヲ得ルヤ否ヤト云フコトナリ。自國港灣ト雖モ敵軍ノ占領スル所トナリタルトキハ之ヲ封鎖スルコトヲ得ベキハ一般ニ認めラルル所ナレドモ、占領セラレザル自國港灣ハ之ヲ封鎖スルコトヲ得ズ。何トナレバ封鎖ハ敵國港灣ノ交通ヲ遮斷スルコトヲ以テ目的トスルモノナレバナリ。倫敦宣言第一條ハ封鎖ノ範圍ヲ敵國及ビ敵ノ占領スル地ノ港灣ニ限ル旨ヲ定メ我海戦法規第三十四條ハ「封鎖ハ敵國又ハ敵國占領地ノ港及沿岸ニ限り之ヲ施行スル者トス」ト定メタリ。封鎖ヲ爲スニハ左ノ五箇ノ要件ヲ具備セザルベカラズ。

(一) 封鎖ノ範圍ヲ限定スルコト

(二) 封鎖ハ封鎖ヲ爲サントスル政府又ハ艦隊ノ指揮官ノ命令ニ依ルコトヲ要ス

(三) 封鎖ニハ實力ヲ要ス

昔時ニ於テハ封鎖ニ實力ヲ必要トセズ。單ニ名義ノミニ依リ之ヲ爲スコトヲ得ベキモノト認めタリ。即チ敵國ノ海岸ハ單ニ之ヲ封鎖スト宣言スルニ依リテ既ニ出入船舶ヲ沒收スルコトヲ得タリ。然レドモ一八五六年ノ巴里宣言ハ其第四ニ於テ「港口ノ封鎖ヲ有效ナラシムルニハ實力ヲ用キザルベカラズ。即チ敵國ノ海岸ニ接到スルヲ實際防止スルニ足ルベキ充分ノ兵備ヲ要スル事」トナシ。倫敦宣言第二條モ亦之ト同一ノ規定ヲ設ケ、我海戦法規第三十五條ハ

千八百五十六年巴里宣言ニ準據シ封鎖ハ其ノ有效ナルガ爲ニハ實力ヲ用フルヲ要ス即チ實際敵岸ニ接到スルコトヲ防止スルニ足ルベキ充分ノ兵力ヲ以テ之ヲ維持スルコトヲ要ス

ト定ム、例外トシテ第三十六條ニ「封鎖ハ封鎖艦隊ニシテ荒天ノ爲一時其ノ地ヲ離レタル場合ニ於テモ仍其ノ效力ヲ失ハザルモノトス」トノ規定アリ(倫敦宣言第四條)。

(四) 封鎖ニハ宣言ヲ要ス(海戦法規第三八條第三九條)

(五) 封鎖ニハ告知ヲ要ス(海戦法規第三八條第四二條以下)

告知トハ或場所ガ封鎖セラレタルコトヲ通知スルヲ云フ。告知ナキトキハ封鎖ノ存在ヲ知ラザル船舶ニ對シ封鎖違反ノ制裁ヲ科スルノ結果ヲ生ジ甚ダ酷ニ失スルヲ以テナリ。告知ニ一般告知及特別告知アリ。一般告知トハ封鎖ヲ爲シタルコトヲ中立國ノ全體ニ對シテ爲ス所ノ告知ニシテ特別告知トハ封鎖區域附近ニ在ル總テノ船舶ニ對シテ爲ス所ノ告知ナリ一般告知ノ未ダ到達セザレ前又ハ到達シタルモ公示ナキ以前ニ本國其他ノ地ヲ出航シタル船舶ハ封鎖ノ事實ヲ知ラザルベキヲ以テ、斯ル船舶ガ封鎖地ニ向テ航行シ又ハ封鎖地ヲ出航セントスルトキハ之ニ對シテモ封鎖ノ特別告知ヲ爲スノ必要アルナリ(海戦法規第四〇條第四四條第四五條)。

封鎖ヲ知ルコトニ現實知了ト推定知了トノ二種アリ。前者ハ如何ナル方法ニ依ルヲ問ハズ現實ニ封鎖ノ存在ヲ知リタルモノニシテ、推定知了トハ封鎖ノ存在ヲ知リタルモノトスル場合ナリ推定知了ハ左ノ三箇ニ歸ス(海戦法規第四四條)。

一 中立港ノ所屬國ニ對シ封鎖ノ告知アリタル後相當ノ期間ヲ經テ船舶ガ該中立

港ヲ出港シタルトキ但反證アル場合ハ此限ニ在ラズ

二 船舶ガ封鎖地域内ノ當該官憲ニ對シテ封鎖ノ告知アリタル後相當ノ期間ヲ經テ出港シタル場合

三 船舶ガ封鎖宣言ノ公示アリタル後自國港又ハ同盟ノ港ヲ出航シタル場合
封鎖地域ヲ出港シ又ハ出港セントスル船舶、封鎖地域ニ航入シ又ハ航入セントスル船舶、封鎖艦隊ノ行動區域内ニ入り附近ヲ徘徊スル船舶、以上ノ三者ハ之ヲ封鎖違反トス。

封鎖違反ト大ラザル場合左ノ如シ。

- ✓一 封鎖區域ヨリ出港シテ封鎖艦隊ノ行動區域外ニ在ルトキ
- ✓二 特許ヲ得テ封鎖區域ヲ出航シ又ハ入航スルトキ
- ✓三 與ヘラレタル猶豫期間内ノ出入
- ✓四 封鎖艦隊ノ追躡ヲ免レタルトキ
- ✓五 封鎖ノ解除セラレタルトキ
- ✓六 船舶又ハ載貨ノ最後ノ到達地ノ如何ニ拘ラス船舶ガ現ニ封鎖セラザル港灣

ニ向テ航行スル場合

封鎖違反ノ制裁ニ付テ起ルハ第一封鎖ヲ破毀シタル船舶ノ處分如何、第二其載貨ノ處分如何、第三人ノ處分如何ノ問題ナリ。古代ニ在リテハ第三ノ問題ニ付テハ乘客ヲ除キ其乗組員ニ對シ處罰ヲ加フベキモノトナシタレドモ、現時ニ於テハ之ヲ認メズ、又乗組員ハ之ヲ俘虜トナスベシトノ說アレドモ是レ亦行ハレズ。故ニ今日ニ於テハ人ニ對シテハ何等ノ制裁ナシ。第一ノ船舶ニ對スル制裁ハ沒收ナリ、第二ノ載貨ニ對スル制裁ハ亦之ヲ沒收トス。但シ載貨ノ所有者ガ載貨ヲ積込ミタル當時ニ於テ船舶ガ封鎖違反ヲ爲スコトヲ知ラズ又ハ知ルヲ得ザリシコトヲ證明スルトキハ此限ニ在ラズ。

第三款 自國船舶及載貨

自國船舶ト雖モ敵ト交通スルトキハ之ヲ沒收ス。但開戦ノ事實ヲ知ラザルモノハ此限ニ在ラズ。敵ト交通スル自國船舶内ノ載貨中船舶所有者、船舶全部ノ備船者又ハ船長ニ關スル貨物、及敵貨モ亦之ヲ沒收ス（海戦法規第三〇條第三一條第三二條第三三條）。

第二節 害敵手段及人

第一款 海軍力ヲ以テスル砲撃ノ制限

海軍力ヲ以テ陸上ヲ砲撃スルコトハ從來無制限ニ認容セラレタリ。然ルニ第二回萬國平和會議ニ於テ決議シタル「戰時海軍力ヲ以テスル砲撃ニ關スル條約」ヲ以テ之ガ制限ヲ設ケタリ。

防守ナキ港、都市、村落、住宅、建物ノ砲撃ヲ禁ジ、此禁止中ニハ軍事上ノ工作物、陸海軍建設物、兵器又ハ軍用材料ノ貯藏所、敵ノ艦隊又ハ軍隊ノ用ニ供セラルベキ工場及設備竝ニ港内ニ在ル軍艦ヲ包含セザルモノトス。海軍指揮官ハ相當ノ期間ヲ以テ警告ヲ與ヘタル後地方官憲ニ於テ右期間内ニ之ヲ破壊セザリシ場合ニ於テ他ニ全ク手段ナキトキハ之ヲ砲撃スルコトヲ得（第一條第二一條）。

○防守セラレザル港、都市、村落、住宅又ハ建物ハ地方官憲ガ其附近ニ在ル海軍ノ目前ノ需用ヲ充ス爲メ必要ナル糧食又ハ軍需品ノ徵發ヲ正式ノ催告ニ依リ命ゼラレタルニ拘ラズ之ニ應ズルコトヲ拒ミタル時ハ明示ノ通告ヲ爲シタル後之ヲ砲撃スルコトヲ得。取立金ヲ支拂ハザルヲ理由トシテハ之ヲ砲撃スルコトヲ得ズ（第三條第

第二款 病者、傷者、難船者、病院船

「ジエネヴァ」條約ハ陸戰ニ限り行ハルルモノニシテ海戰ニ適用セララルコトナカリシガ、一八九九年ノ第一回平和會議ニ於テ之ヲ海戰ニ應用スルノ條約ヲ約定シ、次テ一九〇七年ノ第二回平和會議ニ於テ之ヲ修正セリ。是レ現行ノ條約ナリ。

第一條 軍用病院船即チ傷者、病者及難船者ヲ救護スル唯一ノ目的ヲ以テ國家ニ於テ製造シ又ハ設備スル船舶ニシテ開戰ノ際又ハ戰爭中其ノ使用ニ先チ船名ヲ交戰國ニ通告シタルモノハ戰爭ノ繼續中ニテ尊重スベク且捕獲スルコトヲ得ザルモノトス

第二條 私人又ハ公認セラレタル救恤協會ノ費用ヲ以テ全部又ハ一部ヲ艤裝シタル病院船ニシテ其ノ所屬交戰國ガ之ニ官ノ命令ヲ付シ且開戰ノ際又ハ戰爭中其ノ使用ニ先チ船名ヲ對手國ニ通告シタルモノハ亦均シク尊重セラレ且捕獲ヲ免ルルモノトス

右船舶ハ其ノ艤裝中及最後ノ發航ノ際當該官憲ニ於テ監督シタルコトヲ證明ス

ル同官憲ノ書類ヲ携帶スベシ

第三條 中立國ノ私人又ハ公認セラレタル協會ノ費用ヲ以テ全部又ハ一部ヲ艤裝シタル病院船ニシテ豫メ本國政府ノ同意ヲ得且交戰國ノ一方ノ許可ヲ得テ該交戰國ノ指揮ノ下ニ立チ開戰ノ際又ハ戰爭中該交戰國ヨリ其ノ使用ニ先チ船名ヲ對手國ニ通告シタルモノハ尊重セラレ且捕獲ヲ免ルルモノトス

以上ノ船舶ハ軍事上ノ目的ニ使用スベカラズ。又戰鬪者ノ運動ヲ妨碍スベカラズ。此等ノ船舶ニハ白字ニ赤十字ノ旗ト國旗トヲ掲ゲ、中立國ニ屬スルモノナルトキハ右ノ外指揮ヲ受クル交戰國ノ國旗ヲ大橋ニ掲グベシ。軍艦内ノ戰鬪ノ場合ニハ病室ハ爲シ得ル限り之ヲ尊重庇護スベシ。病院船及艦内病室ガ害敵行爲ニ使用セララルトキハ其ノ保護ヲ失フ。交戰者ハ中立船ニ依頼シテ傷者、病者、難船者ヲ收容看護セシムルコトヲ得。此ノ依頼ニ應ジテ傷者、病者ヲ收容シタル船舶ハ特別ノ保護及一定ノ特典ヲ享有スベシ。被捕獲艦船内ニ在リテ教法、醫療及看護ニ従事スル人員ハ不可侵ニシテ俘虜ト爲スコトヲ得ズ。

交戰國ノ軍艦ハ船舶ノ國籍如何ヲ問ハズ軍用病院船、救恤協會若ハ私人ニ屬スル

病院船、商船、遊船又ハ端舟内ニ在ル傷者、病者又ハ難船者ノ引渡ヲ請求スルコトヲ得。交戦國ノ一方ノ難船者、傷者、又ハ病者ニシテ他ノ一方ノ權内ニ歸シタル者ハ俘虜タリ、之ヲ俘虜ト爲シタル交戦者ハ事情ノ如何ニ依リ、或ハ之ヲ抑留シ或ハ之ヲ自國港、中立港、又ハ對手國ノ港ニ送致スルコトヲ得。難船者、傷者又ハ病者ハ中立國ニ上陸シタルトキハ中立國官憲ハ之ヲシテ再ビ作戦動作ニ加ハラザラシムル様抑留スベシ。

第三款 水 雷

水雷敷設ノコトハ自動觸發海底水雷ノ敷設ニ關スル條約ヲ以テ之ヲ約定ス。交戦國ガ水雷ヲ敷設スルコトヲ禁ゼラレタル場所ハ中立國ノ領海ニ限ル。水雷敷設ノ禁止ガ右條約ニ定メラレタル場合左ノ如シ。

- 一 敷設者ノ監理ヲ離レテヨリ長クトモ一時間以内ニ無害ト爲ルノ構造ヲ有スルモノヲ除クノ外無繫維自動觸發水雷ヲ敷設スルコト
- 二 繫維ヲ離レタル後直ニ無害ト爲ラザル繫維自動觸發水雷ヲ敷設スルコト
- 三 命中セザル場合ニ無害ト爲ラザル魚形水雷ヲ使用スルコト

四 單ニ商業上ノ航海ヲ遮斷スルノ目的ヲ以テ敵ノ沿岸及港ノ前面ニ自動觸發水雷ヲ敷設スルコト

中立國自ラガ其ノ沿岸ニ自動觸發水雷ヲ敷設スルトキハ交戦者ト、同一ノ規定ニ遵據シ且同一ノ豫防手段ヲ執ルコトヲ要ス。

第四款 海底電線

一九〇一年「ブルユクセル」ニ開キタル國際法協會ハ戰時ニ於ケル海底電線切斷ニ關スル制限ヲ議決シタリ。然レドモ是レ學會ノ議決ニシテ國家ヲ拘束スルノ力ヲ有セズ。而シテ條約ニ於テ此事ヲ定メタルモノナシ。我海戰法規ノ定ムル所ニヨレバ之ヲ切斷スルコトノ許可又ハ禁止セラルル場所左ノ如シ、尙ホ此事ニ付テハ併セテ陸戰ノ法規慣例ニ關スル規則第五十四條ヲ參照スベシ。

第一 敵國領土間ヲ連絡スル海底電線交戦國一方ト敵國トヲ連絡スル海底電線ハ中立國領水ヲ除クノ外如何ナル場所ニ於テモ之ヲ切斷シ其ノ他軍事上必要ナル處分ヲ爲スコトヲ得

第二 敵國ト中立國トノ領土間ヲ連絡スル海底電線又ハ中立國領土ヲ首尾トスル

モ敵國ノ領土ヲ通過スル海底電線ハ絶對的必要アルトキハ中立國領水ヲ除クノ外如何ナル場所ニ於テモ之ヲ切斷シ其ノ他軍事上必要ナル處分ヲ爲スコトヲ得

第三款 無線電信

敵國領土内ニ在ル無線電信海岸局ハ其ノ所有者ノ如何ヲ問ハズ軍事上ノ必要ニ應ジ之ヲ押收シ、又ハ破壊シ其ノ他通信ヲ不可能ナラシムベキ處分ヲ爲スコトヲ得ベシ、船舶ニ無線電信ノ裝置アルコトハ中立義務ノ違反トナラズ。軍艦ノ指揮官ハ作戰行動上必要アルトキハ無線電信ノ裝置ヲ有スル船舶ニ對シ左ノ事項ヲ禁止スルコトヲ得。

- 一 艦隊、軍艦又ハ軍用船ノ位置及其ノ作^レ作ニ關スル通信ヲ發送スルコト
- 二 艦隊、軍艦又ハ軍用船ヨリ發スル^レレヲ登錄スルコト
- 三 艦隊、軍艦又ハ軍用船ノ通信ヲ妨害スベキ一切ノ行爲ヲ爲スコト
- 四 暗號電信ヲ發信スルコト
- 五 無線電信ノ或用語ヲ用フルコト

第三節 拿捕、捕獲、捕獲審檢所

軍艦ガ船舶ヲ拿捕セントスルトキハ先ヅ、停船ヲ命ジ次デ臨檢ヲ爲シ尙ホ疑アルトキハ搜索ヲ爲シ其結果ニ於テ拿捕スルト否トヲ決スベシ(海戰法規第一二六條以下) 被拿捕船ヲ破壊シ得ベキ場合ヲ敵船ト中立船トニ分ツ。

第一 敵船

第二百二十二條(海戰法規) 拿捕シタル敵船ヲ帝國港ニ送致スルガ爲帝國軍艦ノ安全又ハ作戰行動ノ成效ヲ害スト認ムル場合ニ於テハ之ヲ破壊スルコトヲ得

第二百二十三條 前條ノ破壊ヲ爲スニ當リテハ艦長ハ豫メ該船舶内ニ在ル一切ノ人員ヲ安全ノ場所ニ移シ且審檢上必要ナル一切ノ書類物件ヲ總テ艦内ニ轉載スベシ

第二 中立船

第二百二十五條 艦長ハ其ノ拿捕シタル中立船ヲ破壊スルコトヲ得ズ

第二百二十六條 拿捕シタル中立船ニシテ其沒收セラ^レルベキコト明ナリト認ムルモノハ之ヲ帝國港ニ送致スルガ爲帝國軍艦ノ安全ヲ害シ又ハ現ニ從事スル作戰行

動ノ成效ヲ害スル場合ニ於テハ之ヲ破壊スルコトヲ得

第二百二十七條 前條ノ破壊ヲ爲スニ當リテハ艦長ハ豫メ該船舶ニ在ル一切ノ人員ヲ安全ノ場所ニ移シ且捕獲ノ有效ナルコトヲ檢定スルニ必要ナリト認ムル一切ノ船舶書類及其ノ他ノ書類物件ヲ艦内ニ轉載スベシ

捕獲審檢ニ關スルコトハ捕獲審檢令(明治二十七年勅令第一四九號明治三十七年勅令第五五號、明治三十八年勅令第四一號第一九九號大正三年勅令第一八八號)ヲ見ルベシ。國內ノ捕獲審檢所ノ檢定ニ對シ不服アルトキハ國際捕獲審檢所ヲ設ケテ之レガ最終ノ檢定ヲ受クベシトノ決議ハ一九〇七年第二回萬國平和會議ニ於テ定メラレタル所ナレドモ、我國ハ之レニ加入セズ、又加入シタル諸國ニ於テモ未ダ之ヲ實行スルニ至ラズ。

第七章 休 戰

休戰ハ國家間ノ戰爭ノ休止ナリ(陸戰ノ法規慣例ニ關スル規則第三六條)。之ニ反シテ休闘ハ交戰國一方ノ軍隊ト他方ノ軍隊トノ間ニ成立スル闘爭中止ノ合意ナリ。

即チ後者ニ在リテハ約束ノ當事者ハ軍隊タルニ反シ、前者ニ於テハ約束ノ當事者ハ國家ナリ。休闘ニ於テハ唯攻撃的動作ヲ止ムルノミニシテ守備的動作ハ自由ナリト雖モ、休戰ニ在リテハ攻守共ニ爲スヲ得ザルヲ原則トス。休戰ニ在リテハ多クノ場合ニ於テ其戰爭全部ノ中止ヲ爲スモ、休闘ニ在リテハ軍隊ノ或部分ニ限り闘爭ノ休止ヲ爲スノミ。兩者ハ又其目的ヲ異ニシ、休闘ハ傷者ノ收容ヲ爲スガ如キ一時的必要ノ爲ニスルモノナルニ反シ、休戰ハ多クハ講和ノ準備ノ爲ニスルモノナリ。

休戰條約一たび締結セラルレバ一切ノ作戦行動ヲ爲スヲ得ザルヲ原則トセザルベカラズ。軍隊ノ數ヲ増加スルコト糧食ヲ運送スルコトノ如キモ亦作戦行動ノ内ニ入ルベキヤ將タ其準備ニ過ギズトシテ休戰期間内ニ於テモ尙之ヲ爲シ得ベキヤ、其限度如何ニ關シ國際公法上一定ノ原則無シ。左掲日清休戰條約(明治二十八年)第三條ハ此問題ヲ合意的ニ決定シタリ。

第三條 日清兩帝國政府ハ本約定ノ存スル間ハ攻守ノ孰レヲ問ハズ各其滯陣ノ方面ニ於テ進撃ノ備ヲ加ヘ或ハ援兵ヲ派シ其他一切戰闘力ヲ増加セザルベキコトヲ約ス、然レドモ現ニ戰地ニ於テ戰闘ニ從事スベキ軍隊ヲ増加スルノ目的ニア

ラザル以上ハ兩帝國政府ニ於テ新ニ兵員ヲ配置運送スルコトヲ妨ゲザルモノトス

休戰ハ作戰行動ノ中止ニ過ギザルガ故ニ開戰後ニ生ジタル行爲ノ結果ヲ維持スルコトハ自由ナリ。即チ封鎖シタル港ノ封鎖ハ尙ホ繼續スベク、占領シタル敵國ノ土地ハ之ヲ撤退スルヲ要セズ。若シ強テ之ニ反スル行爲ヲ敢テセントセバ特別ノ約定ヲ要ス。中立國船舶ガ禁制品ヲ搭載スル場合ニハ休戰中ト雖モ尙ホ拿捕スルヲ得ルヤ否ヤ。理論ヨリスレバ拿捕ハ戰爭行爲ノ一種ナレバ之ヲ爲スヲ得ズト云ハザルベカラズ。然レドモ特別ノ條約アル場合ハ此限ニアラザルナリ。日清休戰條約第四條ニハ「海上ニ於ケル兵員軍需及其他一切戰時禁制品ノ運送ハ戰時條約ニ依リ捕獲セラルルコトアルベキモノトス」ト規定シ、其拿捕シ得ベキ旨ヲ特約セリ。休戰ノ時期モ亦條約ノ定ムル所ニ依ルベキモノトス。即チ休戰ハ何時ニ始リ何時ニ終ルヤヲ定ムベキモノトス。其始期ハ條約ノ成立シタル時ニ始ルニアラズシテ通知ガ總テノ軍隊ニ達シタル時ヨリ始ルモノトス（陸戰ノ法規慣例ニ關スル條約第三八條）。

休戰ニ一部休戰アリ全部休戰アリ。一部休戰ハ一定ノ區域ニ於ケル戰鬥ノ中止ニ

シテ、全部休戰ハ其全部ニ及ブモノナリ。日清戰爭ニ於ケル休戰ハ其一部休戰タルコトヲ休戰條約第一條ニ於テ明ニセリ。故ニ其休戰中ト雖モ臺灣ニ於テハ依然戰爭ヲ繼續シタリ。之ニ反シ日露戰爭ノ休戰ノ場合ハ全部休戰ニシテ、軍隊及艦隊ノ全部ハ其戰爭區域ノ孰レノ場所ニ於テモ戰鬥ヲ中止セリ（陸戰ノ法規慣例ニ關スル條約第三七條）。

休戰中ト雖モ各交戰國ノ軍隊ハ對陣スルヲ以テ或ル一定ノ方法ヲ設ケザレバ休戰ニ拘ラズ相衝突スルノ恐アリ。此衝突ヲ防グ方法トシテ置カルルハ即チ離隔地帯一名中立地帯ノ設定是也。日露戰爭中ノ休戰條約ニ於テ陸戰隊側ハ其兩軍ノ最先軍隊ノ所在地ノ或部分ヲ限リ中立地帯トシ其地帯内ニ侵入スベカラザルモノトスルガ如シ。海軍モ亦經緯線ヲ以テ中立地帯トシテ其區域内ノ侵入ヲ禁ゼリ、斯ノ如クシテ始メテ休戰ノ實ヲ舉グルコトヲ得ベシ。休戰條約ニ違反シタル場合ヲ述ベンニ、休戰違反ニニアリ、一ハ軍隊ガ國家ノ命令ナクシテ違反シタル場合ニシテ、一ハ國家ガ違反シタル場合也。前ノ場合ニ於テ違反ニヨリ損害ヲ生ジタルトキハ違反シタル軍隊ノ所屬國ハ其損害ヲ賠償セザルベカラズ。然レドモ其對手國ハ之ヲ理由トシテ、

自國モ亦條約ヲ破ルヲ得ズ、之ニ反シ後者ノ場合ハ對手國ノ違反ヲ理由トシ自國モ亦條約ニ違反シ直ニ戰爭狀態ニ復歸スルコトヲ得ルモノトス(第四〇條第四一條)。

第八章 戰爭ノ終了

○第一節 事實上ノ終了

講和條約ニ因ラズシテ戰爭ノ終了スル場合左ノ如シ。

第一 交戰國一方ガ他方ヲ征服シタル場合 例ヘバ一九〇二年英國ガ「トランスバール」ヲ征服シタル場合ノ如シ。

第二 暗黙ノ意思ニ因リ戰爭ガ廢止セラレタル場合 交戰國ガ特ニ戰爭終了ノ合意ヲ爲サザルモ相互ニ公使ヲ派遣スル如キハ是レ平和關係ノ克復ヲ明ニシタルモノニシテ戰爭ハ此等ノ行爲ニ因リ終了シタルモノト云フコトヲ得ベシ。一八六七年ノ佛國ト墨其古トノ戰爭ガ事實上戰鬪ノ廢止ニ因リ終了シタルガ如キ明治二十八年ノ清韓兩國間ノ戰爭終了ノ如キ是ナリ。

○第二節 講和條約ニ因ル終了

講和條約ニハ本條約假條約ノ區別アリ、假條約ハ豫メ本條約ノ内容ヲ概括的ニ定ムルヲ以テ目的トスルコトアリ或ハ休戰條約ノ代用ヲ爲サシムルコトアリ。故ニ假講和條約ヲ締結シタル後ニハ本條約ヲ締結スルヲ常トス。講和條約ヲ爲スニハ假條約ヲ結ビタル後本條約ニ入ルモノアリ、又直ニ本條約ヲ締結スルモノアリ。日清日露又ハ日獨ノ講和條約ノ如キハ後者ニ屬シ、普佛戰爭ニ於ケル普佛講和條約ノ如キハ一八七一年一月ニ假條約ヲ結ビ同年七月ニ本條約ヲ締結セルモノニシテ即チ前者ニ屬ス。

以下講和條約ノ效果ニ付テ説明センニ、講和條約ノ主タル效果ハ戰爭ヲ廢止スルニ在リ。其休戰ト異ル所ハ休戰ニ在リテハ一定ノ期間戰爭ヲ中止スルニ過ギザルニ反シ講和條約ニ因リテ戰爭ノ終了スル場合ハ永久ニ戰爭ヲ止ムルモノトス。茲ニ永久ニ戰爭ヲ止ムルトハ其ノ原因タル問題ハ其終了ニ因リ解決セララルノ謂ニシテ、若シ他ノ原因ノ爲メニ又戰爭ヲ開クコトアルモ是レ前ノ戰爭ノ繼續ニアラズシテ別箇ノ戰爭ナリ。茲ニ戰爭ヲ廢止ストハ戰爭行爲ノ全部及結果ノ維持ヲ止ムルコトヲ意味ス。

第四編 中立

第一章 總論

中立國

中立トハ國家ガ積極的ニモ消極的ニモ直接ニモ間接ニモ戰爭行為ニ加ハラザルコトヲ云フ。國家ガ中立ヲ爲ス方法ハ一般的ニハ中立ノ宣言ヲ爲スニ在リ。然レドモ宣言ハ中立ノ要件ニアラズ。中立ノ宣言ヲ爲サザルモ事實ニ於テ戰爭行為ニ加ハラザレバ中立ナリ。

中立ヲ爲スヤ否ヤハ國家ノ任意ニシテ國家ハ中立セザルベカラザル義務ヲ負フコトナシ。例外ノ場合ハ左ノ如シ。

- 一 永久中立國トナリタル場合
- 二 甲國ガ特定若ハ不定ノ第三國ト交戦スル場合ニ乙國ガ中立スベシトノ義務ヲ甲乙兩國ノ條約ニテ一方的若ハ相互的ニ約定シタル場合 例バ明治三十五年日英同盟協約ニ於ケルガ如シ。

一個人ガ國家意思ニ關係ナク自ラ戰爭行為ニ加ハルコトハ右一個人ノ所屬國家ノ中立違反ノ責ヲ惹起スモノニアラズ。

國家ガ戰爭行為ニ加ハラザルコトガ中立ナルガ故ニ戰爭行為ニ加ハルコトナク單ニ意思ノ表示ヲ爲スコトハ中立義務違反ノ原因トナルモノニアラズ。

第二章 陸上ノ中立

陸上ノ中立ニ付テ第一ニ攻究スベキハ交戦國ノ軍隊ハ中立國ヲ通過シ得ルヤ否ヤ換言スレバ中立國ハ交戦國ノ軍隊ヲ通過セシムルヲ得ルヤ否ヤノ問題ナリ。昔時ニ於テハ之ガ通過ヲ是認シタリキ。然レドモ今日ノ國際法ニ於テハ通過ハ決シテ許スベキモノニアラズトセリ。是レ一ハ事實ニ制セラレタル結果ナリ。蓋シ今日ノ國家ハ古代ニ於ケルガ如ク散在セル領地ヲ有セズ他國ト戰爭ヲ開始スル場合ニ於テハ第三國ノ土地ヲ利用セズシテ、其目的ヲ達スルコトヲ得ベケレバナリ。

交戦國ノ軍隊ガ中立國ニ入りタルトキハ其國ハ其軍隊ノ武装ヲ解キ戰場ニ遠キ一定ノ場所ニ留置シ戰爭ノ終局スルマデ監守セザルベカラズ。何トナレバ若シ其軍隊

ヲ解放スルニ於テハ再ビ本國ニ歸リテ戰爭ニ加入スルカ又ハ敵國ニ赴キテ戰爭ヲ爲スノ恐アレバナリ。斯ノ如ク拘禁スルコトハ素ト交戰國雙方ノ利益ヲ害セザルヲ得ザルノ趣旨ヨリ來リタルモノニシテ、之ヲ稱シテ進入軍隊ノ中立化(Neutralize)ト云フ。陸戰ノ場合ニ於ケル中立國及中立人ノ權利義務ニ關スル條約第十一條ノ規定左ノ如シ。

交戰國ノ軍ニ屬スル軍隊ガ中立國領土内ニ入りタルトキハ該中立國ハ成ルベク戰地ヨリ隔離シテ之ヲ留置スベシ

中立國ハ右軍隊ヲ陣營内ニ監置シ且城寨若ハ特ニ之ガ爲ニ設備シタル場所ニ幽閉スルコトヲ得

許可ナクシテ中立國領土ヲ去ラザルノ宣誓ヲ爲サシメテ將校ニ自由ヲ與フルト否トハ中立國ニ於テ之ヲ決スベシ

交戰國ノ軍隊ガ中立國ニ進入シタルトキ其軍隊ヲ給養スベキ義務ヲ負フモノハ何レノ國家ナリヤ。叙上ノ條約第十二條ニ於テハ之ヲ收容シタル中立國ニ其義務アル旨ヲ規定セリ。但平和克復ノ後ニ於テ其軍隊ノ所屬本國ニ費用辨償ノ請求權ヲ有ス

ルモノトセリ。自國ノ軍隊ヲ供養スベキモノハ自國ナルコト論ヲ俟タザル所ニシテ右規定ハ固ヨリ正當ナルモノト云ハザルベカラズ。唯戰爭中ニ在ルガ故ニ其當時供養ヲ爲スコト至難ナルヲ以テ、後ニ至リテ給養費ヲ辨償セヨト云フニ過ギザルナリ。前述シタル所ハ主トシテ健全ナル軍隊ニ付テノ説明ナルガ、以下其健全ナラザル者即チ病者傷者ニ付テハ如何一取扱フベキカヲ述ベント欲ス。叙上ノ陸戰中立條約第十四條ハ病者傷者ハ戰鬪力ナキ者トシテ其者ノ通過ハ之ヲ許容スルコトヲ得ベシトセリ。但其輸送ヲ爲ス列車ニハ戰鬪ノ人員及材料ヲ搭載スルコトヲ得ズトナス。而シテ其第二項ニ於テハ交戰國一方ノ軍隊ガ交戰國他方ノ病者傷者ヲ携へ來リタル場合ハ作戰動作ニ與ラシメザル様該中立國ニ於テ監守スベシト定ム。余ハ此點ニ付テ疑ヲ懷クモノナリ。余ハ病者傷者ヲ一種ニ區別シテ論ゼザルベカラザルモノト信ズ。即チ其病狀若クハ負傷ガ輕易ニシテ、直ニ平癒スベキモノハ其一ニシテ其重キモノハ其二タリ。而シテ前者ニハ通過ヲ禁スベキモノトスベシ。何トナレバ平癒後直ニ戰爭ニ従事スルコトヲ得ベケレバナリ。之ニ反シ後者ハ不具廢疾或ハ死亡ヲ來スベキモノナレバ之ガ通過ヲ許スモ再ビ戰爭ニ従事スルノ恐ナキガ故ニ其通過ヲ許容ス

ベキモノナリ。

二五六

「ジエネヴァ」條約ヲ海戰ニ應用スル條約第十五條第一項ニハ

地方官憲ノ承諾ヲ得テ中立港ニ上陸シタル難船者、傷者又ハ病者ハ中立國ト交戰國トノ間ニ反對ノ協定ナキ限り再ビ作戰動作ニ加ハルコトヲ得ザラシムル様中立國ニ於テ之ヲ抑留スベシ

ト規定シ陸戰中立條約第十四條ト全ク反對ノ意思ヲ表示セリ。趣旨ニ付テハ「ジエネヴァ」條約ヲ海戰ニ應用スル條約ニ定ムル所ニ賛同セザルベカラズ。

次ニ俘虜ガ中立國ニ入りタル場合ノ事ニ付テハ第十三條ニ左ノ如ク規定ス。

逃走シタル俘虜ガ中立國ニ入りタルトキハ該中立國ハ之ヲ自由ニ任スベシ若其ノ領土内ニ滞留スルコトヲ寛容スルトキハ之ガ居所ヲ指定スルコトヲ得

右規定ハ中立國ノ領土ニ避退スル軍隊ノ引率シタル俘虜ニ之ヲ適用ス

交戰國軍隊ガ中立國ニ携帶シ來リタル武器及戰時用品ハ如何ニスベキヤニ付テハ陸戰ノ場合ニ於ケル中立國及中立人ノ權利義務ニ關スル條約第二條ニ交戰者ハ軍隊又ハ彈藥若ハ軍需品ノ輜重ヲシテ中立國ノ領土ヲ通過セシムルコトヲ得ズトアリ。

又第十一條ニ廣ク軍隊トアルガ故ニ此等モ亦戰爭ノ終ルマデ中立國ニ留置スベキモノナリ。

交戰者ガ中立國ニ於テ爲スベカラザルコト左ノ如シ。

- 一 交戰者ノ爲中立國ノ領土ニ於テ戰鬥部隊ヲ編成シ又ハ徵募事務所ヲ開設スルコト
 - 二 無線電信局又ハ陸上若ハ海上ニ於ケル交戰國兵力トノ通信ノ用ニ供スベキ一切ノ機械ヲ中立國ノ領土ニ設置スルコト
 - 三 交戰者ガ戰爭前ニ全然軍事上ノ目的ヲ以テ中立國ノ領土ニ設置シタル此ノ種ノ設備ニシテ公衆通信ノ用ニ供セラレザルモノヲ利用スルコト
- 中立國ガ認容シテ可ナル場合ノ該條約中ニ認めラレタルモノ左ノ如シ。
- 一 中立國ハ其ノ領土ニ於テ行ハレタルモノニ非レバ中立違反ノ行爲ヲ處罰スルヲ要セズ
 - 二 中立國ハ交戰者ノ一方ノ勤務ニ服スル爲個人ガ箇々ニ其ノ國境ヲ通過スルノ事實ニ付其ノ責ニ任ゼズ

- 三 中立國ハ交戦者ノ一方又ハ他方ノ爲ニスル兵器、彈藥其ノ他軍隊又ハ艦隊ノ用ニ供シ得ベキ一切ノ物件ノ輸出又ハ通過ヲ防止スルコトヲ要セズ
- 四 中立國ハ其ノ所有ニ屬スルト會社又ハ個人ノ所有ニ屬スルトヲ問ハズ交戦者ノ爲ニ電信又ハ電話ノ線條竝無線電信機ヲ使用スルコトヲ禁止シ又ハ制限スルコトヲ要セズ

交戦國ハ中立國ノ領土ヨリ來リタル鐵道材料ニシテ該中立國又ハ私立會社ハ個人ニ屬シ及屬スト認ムルモノハ必要已ムヲ得ザル場合及程度ニ於テスルモノノ外之ヲ徵發使用スルコトヲ得ズ。右材料ハ成ルベク速ニ本國ニ送還スベシ。

第三章 海上ノ中立

- 交戦國ハ中立國ノ主權ヲ尊重スベク中立領土又ハ領水内ニ於テ中立違反ヲ構成スベキ一切ノ行爲ヲ爲スベカラス。捕獲權、臨檢搜索權ノ行使ヲ中立領水内ニ於テ爲スハ中立權ニ對スル侵害ナリ。中立領水内ニ於テ船舶ガ捕獲セラレタルトキハ
 - 一 捕獲セラレタル船舶ガ尙ホ中立國ノ管轄内ニ在ルトキハ中立國ハ該船舶ノ職

員及船員ト共ニ之ヲ解放スル爲且捕獲者ガ右船舶ニ乗込マシメタル艦員ヲ抑留スル爲施シ得ベキ一切ノ手段ヲ盡スヲ要ス。

- 二 捕獲セラレタル船舶ガ既ニ該中立國ノ管轄外ニ在ルトキハ中立國ハ捕獲國政府ニ對シ該船舶ヲ其職員及船員ト共ニ解放スルコトヲ要求スルノ權利アリ。此要求ニ對シ捕獲國ハ之ニ應ズベキ義務ヲ有ス。

交戦者ハ航海ノ不能、海上ノ險惡、又ハ燃料若ハ糧食ノ缺乏ノ事由ニ因ルノ外、被捕獲船ヲ中立港内ニ引致スルコトヲ得ズ。此外交戦者ニ禁ゼラルル事項左ノ如シ。

- 一 中立領土内又ハ中立領水内ニ在ル船舶内ニ捕獲審檢所ヲ設ケルコトヲ得ズ
- 二 中立ノ港又ハ領水ヲ以テ敵ニ對スル海軍作戰根據地ト爲スコトヲ得ズ。殊ニ無線電信局又ハ陸上若ハ海上ニ於ケル交戦國兵力トノ通信ニ供スベキ一切器械ヲ設置スルコトヲ得ズ

三 中立國ノ法令中別段ノ規定ナキトキハ中立國ノ港又ハ泊地ニ各交戦國ノ軍艦ノ同時ニ滞在シ得ベキ數ハ三隻ヲ超ユルヲ得ズ

中立國ガ特ニ中立義務トシテ遵奉スベキ事項ノ海戰ノ場合ニ於ケル中立國ノ權利

義務ニ關スル條約ニ定メラレタルモノ左ノ如シ。

- 一 中立國ハ如何ナル名義ヲ以テスルヲ問ハズ交戰國ニ對シ直接又ハ間接ニ軍艦、彈藥又ハ一切ノ軍用材料ヲ交付スルコトヲ得ズ(第六條)
 - 二 中立國政府ハ自己ト平和關係ヲ有スル國ニ對シ巡邏ノ用ニ供シ又ハ敵對行爲ニ加ハルベキモノト信ズベキ相當ノ理由アル一切ノ船舶ガ其ノ管轄内ニ於テ艦裝又ハ武裝セラルルコトヲ防止スル爲施シ得ベキ手段ヲ盡スコトヲ要ス。中立國政府ハ又巡邏ノ用ニ供シ又ハ敵對行爲ニ加ハルベキ船舶ニシテ其ノ管轄内ニ於テ全部又ハ一部戰爭ノ用途ニ適合セシメタルモノハ總テ其ノ管轄外ニ出發スルコトヲ防止スル爲同様ノ監視ヲ爲スコトヲ要ス(第八條)
 - 三 中立國ハ其港泊地及領水ニ於テ中立違反ヲ防止センガ爲施シ得ベキ手段ニ依ル監視ヲ行フコトヲ要ス(第二五條)
- 次ニ同條約ニ於テ中立國ニ認容セラレタル事項左ノ如シ。
- 一 中立國ハ交戰者ノ一方又ハ他方ノ爲ニスル兵器、彈藥、其ノ他軍隊又ハ艦隊ノ用ニ供シ得ベキ一切ノ物件ノ輸出又ハ通過ヲ防止スルコトヲ要セス(第七條)

二 交戰國軍艦及其ノ捕獲シタル船舶ガ單ニ中立領水ヲ通過スルコトハ其ノ國ノ中立ヲ侵害スルモノニ非ズ(第十條)。從ツテ反面ヨリ見テ中立國ハ右ノ艦船ノ單純ナル通過ヲ抑止スルノ義務ヲ負フコトナシ

三 中立國ハ其ノ公許水先人ヲ交戰國軍艦ニ於テ使用スルニ任スコトヲ得

交戰國ノ軍艦軍用船ハ中立港灣ニ入りタルトキハ二十四時間内ニ退去セザルベカラズ。同條約第十二條ニ曰ク

中立國ノ法令中別段ノ規定ナキトキハ交戰國軍艦ハ本條約ニ規定シタル場合ヲ除クノ外二十四時間以上中立ノ港、泊地又ハ領水ニ碇泊スルコトヲ得ズ

右ノ期間ハ軍艦ノ破損ノ爲又ハ海上ノ状態ニ因ル場合ノ外延長スルコトヲ得ズ

右軍艦ハ遲延ノ原因止ムトキハ直ニ出發スベシ。二十四時間内ニ退去スベキ軍艦ガ退去ヲ爲サザル場合ノ處分如何ハ第二十四條ニ左ノ如ク規定セリ。

交戰國軍艦ニシテ中立官憲ノ通告アルニ拘ラズ滯留スルノ權利ヲ有セザル港ヲ去ラザルトキハ中立國ハ該軍艦ヲシテ戰爭ノ繼續中出航スルコト能ハザラシムル爲必要ト認ムル手段ヲ執ルコトヲ得。該軍艦ノ艦長ハ右手段ノ實行ヲ容易ナラシム

ルコトヲ要ス

二六二

交戦國軍艦中立國ノ爲ニ抑留セラルルトキハ將校其ノ他ノ艦員モ亦均シク抑留セラルベシ

右抑留セラレタル將校其ノ他ノ艦員ハ之ヲ該軍艦内ニ留メ又ハ他ノ船舶内若ハ陸上ニ宿泊セシムルコトヲ得ベク、且之ヲシテ必要ナリト認ムル制限的規律ニ服セシムルコトヲ得ルモノトス。但シ軍艦ノ保存上必要ナル人員ヲ常ニ艦内ニ殘シ置クコトヲ要ス

將校ハ許可ナクシテ該中立領土ヲ去ラザル旨宣誓セシメタル上之ニ自由ヲ與フルコトヲ得

次ニ二十四時間間隔規則ヲ説明スベシ。交戦國雙方ノ艦船ガ同時ニ中立國ノ同一港灣内ニ入りタル場合ニ若シ其雙方ノ艦船ヲ同時ニ若クハ一方ノ出航後短カキ時間經過ノ後他方ノ出航ヲ許ストキハ領海ニ近キ公海ニ於テ戦闘ヲ爲スノ恐アリ、又其一方ガ商船ナルトキハ後ニ出航シタル他方ノ軍艦之ヲ追躡シテ拿捕スルノ恐アリ。故ニ一方ノ艦船ガ出航シテ二十四時間ヲ經過スルニアラザレバ他方ノ軍艦ノ出航ヲ

許可セズト云フモノ即チ二十四時間間隔規則ノ内容ニシテ條約第十六條ノ規定スル所ナリ。

交戦國雙方ノ軍艦ガ同時ニ中立國ノ港又ハ泊地ノ一ニ在ルトキハ一方ノ軍艦ノ出發ト他方ノ軍艦ノ出發トノ間ニ少クモ二十四時間ヲ經過セシムルコトヲ要ス（以上ハ雙方軍艦タル場合ナリ）

出發ノ順序ハ到着ノ順序ニ依リテ之ヲ定ム但シ最初到着シタル軍艦ニシテ碇泊ノ法定期間ノ延長ヲ許可セラルル場合ニハ此ノ限ニ在ラズ

交戦國軍艦ハ其ノ對手國ノ國旗ヲ掲グル商船ガ中立ノ港又ハ泊地ヲ出發シタル後二十四時間内ニ出發スルコトヲ得ズ（此項ハ前ニ一方ノ船舶ガ出航シ後ニ他方ノ軍艦ガ出航スル場合ヲ規定シタルモノナリ）

一般ニハ交戦國軍艦ハ中立國港灣ニ入ルノ權利ヲ有ス。入港シタル後ニ於テハ如何ナル範圍ニ於テ貨物ノ積卸ヲ爲スコトヲ得ルカ。一般ノ認ムル所ニ依レバ其軍艦ノ航行及乗組員ノ生存ニ必要ナルモノハ積込ムヲ得。而シテ其以外ノモノハ一切積込ムヲ得ズ。故ニ軍人及武器等ハ卸スコトヲ得ズトセリ。蓋シ生存ニ必要ナルモノ

以外ノ物資ノ積込ヲ許スニ於テハ交戦國軍艦ノ便宜ヲ計リ爲メニ交戦國ニ援助ヲ與フルノ結果トナレバナリ。此ノ主義ノ唯一ノ例外トシテ認ムベキモノハ「スエズ」運河ノ中立法規ニシテ必要ナル場合ニ千人以内ノ軍人ヲ上陸セシムルコトヲ得ベキ旨ヲ規定セリ。

○燃料ハ素ト軍艦ノ航行安全ニ必要缺クベカラザルモノナレバ之レヲ積載シ得ルコト明白ナリ。然レドモ其積載スル儘ニ放任シテ其額ヲ制限セザレバ多量ノ燃料ヲ積載シ爲ニ軍艦ノ本國ヲ利スルノ恐アリ。是ヲ以テ其積載スベキ量ニ付キ制限ヲ設ケザルベカラズ。其制限ニ付テハ各國中立法規ノ定ムル所一定セズ。或ハ本國ノ港灣ニ歸著スルニ要スル限度トシ或ハ次ノ港ニ至ルマデニ要スル限度トス。此點ニ付テ海戦ノ場合ニ於ケル中立國ノ權利義務ニ關スル條約ノ規定左ノ如シ（此ノ内第一九條ハ我國ノ留保スル所ナリ）。

第十九條 交戦國軍隊ハ平時ニ於ケル軍需品ノ通常搭載量ヲ補充スル場合ニ限中立ノ港又ハ泊地ニ於テ其ノ積込ヲ爲スコトヲ得

右軍艦ハ又最近本國港ニ達スル爲ニ必要ナル量ニ限燃料ヲ積入ルルコトヲ得

中立國ガ供給スベキ燃料額ヲ定ムルニ付軍艦ノ燃料艙ノ全容量ヲ補充スルヲ許スノ制ヲ採レル場合ニ於テハ交戦國軍艦ハ該中立國ニ在リテハ前記ノ量ヲ補充スルニ必要ナル燃料ヲ積入ルルコトヲ得

中立國ノ法規ニ依リ軍艦ガ其ノ到着ヨリ二十四時間ノ後ニ非ザレバ石炭ノ供給ヲ受クルヲ得ザルトキハ法定ノ碇泊期間ヲ二十四時間延長スルモノトス

第二十條 交戦國軍艦ニシテ中立國ノ港ニ於テ燃料ヲ積入レタルモノハ三箇月ヲ經過スルニ非ザレバ同一中立國ノ港ニ於テ再ビ其ノ積載ヲ爲スコトヲ得ズ

交戦國ノ軍艦ハ中立國ノ港灣内ニ於テ修繕ヲ爲スノ權利ヲ有ス。然レドモ左ノ制限ニ服セザルベカラズ（第一七條）。

- 一 航海ノ安全ニ缺クベカラザル程度以上ニ修理スベカラズ
- 二 戦闘力ヲ増加スルコトヲ得ズ
- 三 實行スベキ修理ノ範圍ニ付中立國官憲ノ決定ヲ仰グベシ
- 四 爲シ得ル限り速ニ修理スベシ

大正十一年四月十五日 印刷
 大正十一年四月二十日 發行

國際公法論綱與付
 定價金貳圓



著者 中村進午
 發行者 波多野重太郎
 印刷者 吉原良三

東京市神田區仲猿樂町一番地
 東京市牛込區早稲田龜卷町百四十一番地

發兌元

東京神田區仲猿樂町
 電話二二五五番
 九段 電話二二七六番

巖松堂書店

關西發賣所
 滿鮮發賣所

大阪市北區
 電話一六五三番
 三丁目 電話一六九七番
 目 電話一六九七番
 本町二丁目 電話二四五四番

巖松堂大坂店
 巖松堂京城店

1925
 1919

266
 146
 422

266
 146
 422

266
 146
 422

266
 146
 422

502
102

終